

瀬笈葉を愛しすぎてる
人が鬼滅の世界に転生
して植物のような特異
体質を得て日輪刀を
食った話

カラー・ロザリオ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼滅の世界に転生した然葉は植物のような特異体質だった。瀬笈葉を愛して止まない彼は葉の呼吸を作り出し、植物と会話できるまで極めた。

最終選別で炭治郎と同期になった彼は原作死亡者達を救うべく奮闘する。

※この小説には原作のネタバレが含まれています。アニメ勢の人もお気をつけください。

目次

瀬笈葉ってどんなキャラクター？	1
転生したらハードな世界だった	6
最終選別	11
実食！ 日輪刀！ ついでに初任務	18
白い鬼	25
彌豆子は醜女じゃない！	34
知っているからこそその攻略	42
再開	49
光輪刀の誤法	58
お姉ちゃん	63
那田蜘蛛山	71
誤算	81
上手いかない世界	89
ヒノカミ神楽と深緑	98
胡蝶しのぶへの時間稼ぎと提案	104
機能回復訓練	110
屋根の上の三人	117
無限列車	125
別の葉っぱ	134
悪夢	140
アカザの天敵	149

瀬笈葉つてどんなキャラクター？

瀬笈葉せおいはとは、東方Project二次創作フリーゲーム。”東方自然療せおいはのオリジナルキャラクターであり主人公。植物の下級妖怪。

ドがつくほどの天然で明るく元気で誰にたいしても敬語。びつくりするぐらいの方向音痴で作中でも間違えすぎて元気を無くす。可愛い。

だがお人好しで目の前で困っているとが起きていれば自らを犠牲にしても解決しに行く。

努力家でもある。

血は万能薬で甘い。栄養のある土と水があればすぐさま怪我が治り血も作られる。

実は才能があり魔理沙のマスターズパークを見ただけで習得したり血を抜かれまくった後に休んだとは言えフランの弾幕を（泣きながら）かわす。

能力は”植物の声を聞く程度の能力”

植物に頼んで攻撃してもらおうが不思議と一度も断られた事がない。

ストーリー。

自分の住んでいるところの植物が元気を無くしてその異変を解決してもらおうと博麗神社に行く。お賽銭をあげるさい霊夢の一言で札をいれちゃう。

霊夢と魔理沙と共に異変解決にのりですが、植物が枯れる異変とは別に妖怪や人間が狂いだすと言う異変も起き始めていた。葉の血で治る事がわかると色んな場所で狂った者達を治しに行く。その課程で足手まといになったり力不足を感じて努力して強くなるうとする。うどんげ、妹紅、咲夜、レミリアも加わって異変解決にのりだす。

魔理沙の弟子になる。

既に枯れた所を通ろうとすると気分が悪くなる。

そんな中、植物はどんどん枯れていく道中で。本来の目的を後回しにしているのを咎められたりするも葉は全て解決させる意思を見せる。

しかし、葉が通った所から植物が枯れて言っている事が発覚し八雲藍が異変の首謀者として葉を退治しに来たり、同じ考えの者たちに退治しにされかけたりする。時には腕を吹っ飛ばされる。

そんな中、虹霓文花が異変の首謀者と名乗り出る。虹霓は瀬笈葉と同じく異変解決に

動いていた。博麗神社に行くよう言ったのも彼女。葉が妖怪になってまもない頃一週間の間だけだが色々教えてくれたり面倒を見てくれたりしてくれたりしてくれた。その僅かな時間だが葉は彼女をお姉ちゃんと呼ぶようになる。

お姉ちゃんを霊夢達と共に自ら退治することになる。しかし、自身が通った後植物は枯れた事実は変わらさずついには霊夢と戦闘になる。霊夢も葉じゃないと目をそらす所があるも自分のせいだとわかってしまっていた。霊夢はそのまま封印するつもりでいたが文に助け出された。

助けた理由は”封印するまでの時間を作るため”葉に考える時間を与えた。ついに心が折れて封印されることを望むがフランや子傘の言葉で別の解決方法を探す決意をする。魔理沙やレミリア、咲夜も行動を共にする。

だが、全ての事実が風見幽香によって語られる。

葉が枯らしていたのは事実。しかし、それは幻想郷全ての植物が望んだ事だった。幻想郷は度重なる異変で”毒”を溜め込んでしまい、溜めきれなくなってしまうその毒を撒き散らし始めた。その毒が妖怪や人を狂わす。葉はその植物達の力を吸収し、毒を浄化して元に戻す役目を与えられていた。その為、目の前の事を放っておけないほどのお人好しの性格でなくてはならない。作られた性格と能力であることが発覚する。攻撃のお願いを一度も断られたことがないのはそのせいである。枯れた所を行うこうとする

と気分が悪くなるのもそのせいである。また、幻想郷の住人の心にこの異変、葉の存在を刻む為でもある。

全ての植物の力を吸収すれば最後に毒を浄化して植物を元に戻して解決。で、終わると思った葉だったが、葉のいないところで命を落とすと言われる。また、そんな力を溜め込んだ葉に既に異常が出てるとも。しかも、葉が役目を果たさなければ幻想郷は滅びる。

魔理沙は葉を救う魔法を開発するために躍起になるが、葉は目が見えなくなったり鼻がきかなくなったり等の異常が出る。幽香がなんとかするも限界がきてる。

葉が死ぬ運命を魔理沙は受け入れられず、頑張るも色々あつて魔理沙自身から葉が死ぬ運命にあることを告げる。

葉は妖怪らしく自分が助かる、生きる道を選ぶことを進められたりする。しかし、幻想郷と皆さんが好き。と、役目を果たす事を決意する。

そして役目を果たすとき、直前で自我を失う。霊夢が最後の最後まで世話がやけると言いながら戦闘が始まり、自我を取り戻した葉はラストスペルで全ての植物を元に戻す。そして命を落とす。主人公、瀬笈葉自身がラスボスでありプレイヤーは使用不可となる。

物凄く簡略して書きましたが実際はとてつもなく長いです。一つのイベントだけで30分持つてかれる程の長さであり、普通にプレイしていればクリアに10時間以上はかかります。葉のみを書きましたが他のキャラクターも色々動き、考え、葛藤します。それぞれが決断し、最後を迎えます。

ゲームはRPG形式で、既に倒したボスと再戦し、スペカを強奪したり、陣形と呼ばれるキャラクターの配置や陣形によって能力値が変わったり、サブストーリーもあったり、ミニゲームもあったりと、フリーゲームとしてはポリュームがありすぎるのでプレイしてみてください。

転生したらハードな世界だった

翡翠島ひすいじま 然葉ぜんば そうなづけられた。

俺は生まれ変わった。いわゆる転生と言う奴だろう。異世界ものばっかり読んでいた俺はすぐにわかった。

だとしたらここはどんな世界だろう。楽しみだった。けれど、現実はそのなにワクワクな事は起きなかった。

”鬼”と呼ばれる存在が目の前に現れた。俺は理解した。この世界は”鬼滅の刃”の世界。簡単に人が死んでしまう、残酷な世界だと。

気がついたら、どこかの崖の上だった。ここはどこだろうか。足が痛い。呼吸をするにも苦しきがある。体が重い。どこからか出血している。必死に逃げたんだ。鬼から。でも、肺が痛い。頭がクラクラする。状況を理解する度に体の不調も感じてきてる。やばい。このまま放っておいたら死ぬ。

「そこで何をしているのかな？ その怪我、大丈夫？」

誰だろう。後ろを振り向くとそこには鬼殺隊の服をきた女性が立っていた。見たことがない。知らないキャラクターだ。でも、多分助かった。この人が助けてくれる。

そう思ったら、今度は意識が遠退いた。

次に目を覚ましたら鬼殺隊の女性はいろいろな事を教えてくれた。”日輪刀”のこと、鬼のこと。漫画を読んでいたから知識はあつたが。

俺の親は鬼に殺された。親のいない俺を誰も引き取らなかつた。怪我で休暇中だが女性も任務で長くは入られないこと。誰も頼ることが出来ない。一度死んでいるから死の恐怖を知っている。親を殺された。俺の心が折れるには充分だつた。

「刀の握り方はこう」

女性は俺に刀の握りかた、振り方を教えてくれた。自然を生きるための知識を教えてください。 たつた一週間だつたけれど、絶望に染まろうとしていた俺にとっては光の存在だつた。刀をくれた。余り物と言つていたが、何故持つていたのだろうか。

その一週間は俺にとつて大きな出来事で、鬼にあつたら終わりだつたが、大自然を生きる事ができた。それでも孤独が嫌で俺の頭の中で好きなキャラクターに励まされる妄想をし続けた。妄想癖の強い俺にはとても心強かつた。

その中でも一番好きなキャラクターに俺は少しだけ親近感を覚えていた。この状況が少しだけ似ていたからだ。弱くても諦めず、強くても気取らずに、強い意思を持つて

いて、逃げたい弱音を吐いて諦めかけても前に進むことを決めた。いつしか心の支えから憧れになり、見えない背中を追いかけようになった。

ある日、俺は自身の特異体質に気づいた。不死川玄弥の事を考えると決して不思議ではなかった。植物を大量に摂取し過ぎたこと、ずっと晴天だったことにより、光合成で生きる体質に気づき、さらに体質を強めた。

呼吸は、そもそも“育手”に教わってないので基礎すらできてない。それでも伊之助の事を考えると諦められない。呼吸は頭を柔らかく考える。今ある知識と合わせるに必要なのは“回復の呼吸”だった。自然界では怪我すること、疲労が溜まることは当たり前。ましてやまだ俺はまだ子供。必要な呼吸だった。

それから2年がたった。“回復の呼吸”を会得した。刀も随分と扱えるようになった。歳は13だ。俺の体質はどんどん植物に近づいた。水と栄養のある土があれば治りが早くなり、髪は緑色になった。

憧れていたキャラクターの背中を追いかけていたらいつの間にか自分自身がなりかけているように感じた。それからは俺の呼吸はそのキャラクターをベースにしようとした。回復の呼吸を元に派生を作り出そうとした呼吸は一年で完成した。精度や練度は低い荒削りだが、体質のおかげで良く馴染む。体に合っている。おかげで“型”ができた。戦闘には充分に使えると思う。

炭治郎が15歳で”最終選別”に行ったし、俺もその歳になったら行こうと思う。残り一年はさらなら体の強化と呼吸の強化に専念した。

重大な問題が発生した。最終選別の場所がわからないのと刀の刃こぼれが酷い。刀は仕方ない。だが場所はどうすればいいかわからなかった。前世の記憶を頼りに方法を探した。1つの可能性を見いだした。

俺の体質と呼吸を合わせれば行けるのではないか。植物たちの呼吸を、俺は次第に感じることができるようになっていた。もしかしたら、僅かな違いから言っていることがわかるようになるかもしれない。やってみる価値はあった。

「葉はっぱの呼吸 一枚目 深緑の温もり」

感覚と耳を研ぎ澄ます。植物の僅かな呼吸の違いから植物達の”言葉”を理解しようとした。

「鬼殺隊の最終選別はどこで行われるんだ？ 教えてくれ」

何も変わらない。何もわからない。もっと研ぎ澄ました。もっと集中した。

『~~~~~』

僅かに呼吸が変わった。

『藤の花』

その違いから理解できた。植物達の”言葉”を

『西南西』

場所がわかった。植物たちの言葉を理解したとき、あまりの嬉しさにその場だ走り回った。そのせいでそれ以降の事は聞いてなかった。

俺はお礼を言つて最終選別に行った。

最終選別

葉ーたん可愛すぎ！ 葉ーたん最高！ ああああああああああああああ
 もうマジ天使！！ 生まれてくれてありがとう！！ 帽子のなか見たいいいいい
 ！！！！！！ 毎日のように夢に出てきて励ましてくれてありがとうとおおとおお！！！！

そして今俺は葉ーたんと同じ植物と話せるよおおとおお！！ 葉ーたん夢だけ
 じゃなく今俺の前に出てきてくれええええええ！！ 違う！ 俺が葉ーたんになるん
 だよおおとおおとおお！！！！！！
 「ふう、」

危うく醜態を晒す所だったぜ！！ いやもう晒してた！ 偶然通り道の村の人達に冷
 たい視線で見られてた！

さてと、それは置いといて、さつさと「藤襲山」に急ごう。場所と日にちはわかって
 も時間まではわからないからな。

それにしても随分と遠いからずつと歩き続けても疲れない。ちゃんと強くなってる
 んだな。村の人達が遅く見える。心が折れそうになったりしたりしたけど、何かやんやで絶望
 に染まんなかったのは前世の記憶のおかげだな。鬼滅の世界はハードだが、こういうと

きは楽しいことを考えないとな。

ついた。ここが“藤襲山”か。藤の花、漫画で見るよりはるかに綺麗だ。インスタ映えするなこりや。スマホほしい。

「……………ツ！」

ここを通れば最終選別、一週間生き残れば合格、じゃなければ死。いざ来ると体がふるえる。俺は怖がつているんだ。死ぬ可能性があるからだ。”死”と”鬼”の恐怖をどっちも体験しているから体が震えるんだ！ 落ち着け、呼吸をするんだ！ 呼吸を……………

「あれ?」

恐怖が消えた? いや、心が安らぐ。癒されたいく。忘れてた。深緑の温もりは癒されるんだ。体も、心も。

「スー、ハー」

よし! 葉ーたん。力を貸してくれ。俺を見守ってくれ! お前なら、前に進み続ける。だから俺も、前に進むんだ。

「皆さま、今宵は最終選別にお集まりくださってありがとうございます!」

やべ! そろそろ始まる! ……て、炭治郎がいる! 善逸もだ! てことは、原作の時間軸にいるのか。伊之助は既に入っているんだっけか。ここで誰かと一緒になれ

ば高確率で生き残れる。けれど、それじゃあダメだ。ちゃんと一人で生き残らないと、これから先確実に死ぬ。

「では、いつてらっしやい」

最終選別が始まった。ここはどうする？ 一人で行動するとして、鬼の場所は炭治郎達と違っておれ自身はわからない。教えてもらうか。

「葉の呼吸 一枚目 深緑の温もり」

耳を研ぎ澄まして聞くんだ。

「近くの鬼はどこにいるんだ？」

『西に2体いるよ』

「わかった。ありがとう」

西か、確かにいた！ こいつが一体目か。最終選別の鬼は対して強くないやつばかりだ。強いのは一体だけ。炭治郎が倒してくれる。だが問題は俺だ。強くない鬼より弱いかもしれない。

「お？ 久し振りの人間だ、食ってやろう」

うわ、いぎ見てみると気持ち悪い。でもまあホラゲーの化け物よりはましか。爪が長い。どうする、どう倒すか。いや、下手に考えるな。切ることだけを考えろ！

「葉の呼吸 二枚目 虫食い黄葉」

「ぐああ！ 頸が切れてるう！」

やった！ 切れた！ 少なくともそこらの鬼は倒せる！ よし！ このままもう一体！ 見つけた！ また爪が長い！

「切り刻んで食ってやる！」

「葉の呼吸 四枚目 咲いた葉鞘」
はっぱ

斬れた！ このまま行くぞ！ こちら辺の鬼の頸を落として比較的 safety 地帯を作って休めるところを確保しないと。

「他に鬼はどこにいるんだ！」

次はあつちか！ だいたい後三体ぐらい倒せばこちら辺は比較的 safety になる。炭治郎の方向にさえいかなければ合格はほぼ間違いないだろう。だが油断はできない。索敵はきっちりしておかないと。

「鬼ってこんなにも強いのかよ!!」

誰かの声！ 鬼に追われているのか！ 助けに行くか？ いや、助けた所で後々死ぬ。意味がない。

「くそ！ 来るな！ あつちいけ！」

「肉をよこせえ！」

「うわああああおあああああ！」

瀬笈なら、絶対に助ける！

「このやろう！ 腕を切りやがったな！」

「どうせ再生するから良いだろ！」

「よくも！ よくもー！」

頸を斬った。こいつは、大丈夫か。腕を怪我しているようだ……この最終選別は炭治郎達5人以外は死んでしまう。助けるには人数があまりにも多すぎる。なら、ここに出来るだけの鬼を全て斬ってやる！

「おいお前！ 西の方に行けば鬼は少ない！ そこへ行け！」

「わ、わかった！ ありがとう!!」

鬼の場所は植物達からあらかじめ聞いた！ 最短距離で全員狩る！ 伊之助や善逸達の近くは彼らが狩ってくれる筈だがそこ以外全てやってやる！

一日、二日、三日と日にちが経つ。俺はひたすらに狩りまくった。途中で出会った人達には鬼が比較的少ない場所をおしえた。

そして最終日。

「良く頑張った。俺も……この刀も」

四年間1度も手入れしてなかった刀は一週間の酷使によつと刃と呼べる所がなかつ

た。もう頸は斬れない。けれどまだ落とす事は出来る。何度も突き刺して頸を落とせばいいんだ！

「葉の呼吸 二枚目 虫食い黄葉！」

鬼の頸が落ちた瞬間、刀も折れた。その瞬間、俺を助けてくれた女性の鬼殺隊のことを思い出した。

瀬笈の存在が俺を支えてくれた。でも、それだけじゃない。貴女がいたからこそまで強くなれました。刀をくれたからこそここにこれました。

「ありがとうございます。刀もこんなバカによく頑張つて付き合ってくれたな」
戻ろう。最初の場所へ。

最終選別の結果、炭治郎達を除いた7人いた。いや、7人しかいなかった。もつといた筈なのに。鬼をできるだけ狩つても、狩りきれない。9人は会ったのに。参加者は20人以上いたけれど。

「刀の届かない人は助けられない……か」

「刀だよ刀!! 今すぐ刀を寄越せ!! 鬼殺隊の刀!!」色変わりの刀!!」

あつたな。こんなこと。炭治郎が何とかしてくれるが、だからと言って助けられない理由にはならない!

「この子から手を放せ!! 放さないなら折る!!」

「放さないとその鶏みたいな頭むしりとるぞ！」

「ああ？　なんだテメエらは、やってみろよ!!」

ミシツ　ブチブチ

「ぐっ！　髪はやめろお!!」

玄弥は腕を抑える。良く考えると握力だけで骨折るってすごいな。

「握力だけで俺も折れるかな」

玄弥の左腕を見る。

「お話はすみましたか？　では刀を造る鋼を選んでください」

どれがいいんだろうか。俺にはわからない。けれど、俺は迷わず選んだ。植物体質の体が、この鋼を欲したと感じたからだ。気のせいかもしれない。でも、気のせいじゃないと信じて選んだ。

実食！ 日輪刀！ ついでに初任務

日輪刀が届くまでの間どうしよう。特訓しなきゃ。鬼滅はハードな世界だ。短時間で強くないといけない。

という事で全集中・常中を会得しよう！

「ぜえー！ ぜえー！ ぜえー！」

会得できる筈だ！ 少なくとも、呼吸による葉が目に見えるのであれば俺の呼吸は弱くない！ それに、葉の呼吸は常中を会得しやすい。何故なら葉の呼吸は回復に向いている。癒しの効果がある。つまり、呼吸しているだけで疲れが取れる。呼吸による疲れも減る。最初ツから長時間呼吸ができると言うこと。証拠に最終選別で鬼を狩りまくったけれど炭治郎程の疲労は出てない。できる！ 俺なら出来る！ 多分！

出来なかつた……そうだね。炭治郎だつて一人じゃ出来なかつた。水の呼吸の生流転は呼吸の精度や速度がなきゃ出来ない。今の俺にはそのような型は存在しない。それどころかまだ植物の声が全て聞こえるわけでもないし簡単な言葉しか理解できない。今は速度を高めるんだ。

あ、今日晴天だ。光合成しよう。

光合成すると力が湧くのがわかる。癒される。あれ？ 太陽の光を吸収しているのであればその光をもし日輪刀に送ることが出来れば強くなるんじゃないかね？ て、無理か。吸収出来ても蓄える器官がない。人間にはそんなもん存在しないし、そもそも光を吸収して蓄えるものなんて……………

あつたわ！ 近くにあつたよ日輪刀！ いやまて！ 日輪刀でどうやって体に蓄えられるんだ！ 鉄だぞ！ 食い物でもないし体にはつつけても意味がない！ ……鉄？ 人間の血は鉄分で出来てる！

「い、頂きます」

どうせ折れているんだ。新しいのが来るし。食って鉄分として血に流れれば光合成で吸収した日光を蓄えられるんじゃないか？

「かた！」

いいや！ 植物は時に家を持ち上げる力を持つ！ このぐらいで諦めるわけには行かない！

「バリバリバリバリ!!」

こうして俺は日輪刀を食べ終えた。数日間腹を壊したけど、光合成をした後体内がポカポカするのがわかる。暖かい。よし！ 呼吸の精度を高めるぞ！

こうして俺の十五日が過ぎた。俺の刀は予想通り緑色に変わった。

「緑か……」

早速新たな刀で素振りをする。新品なのか、俺の手に吸い付く感じがする。

「ニヤニヤキモチワルイナ、オマエ」

鏝鴉に言われた。仕方ないだろう! 緑色だぞ! 瀬笈葉の色だぞ! お前! 本

来の俺だったら絶対にこんな色になつたない! この特異体質を磨きあげ、葉の呼吸を
会得して刀も緑だぞ! もうこれ葉ーたと結婚したのと一緒だからな! 努力のか

いがあつた!

「ホク^北トウ^東の^町マ^へムカ^迎エ!

最初の任務か、最終選別で余裕で鬼の頸をとれた。多少強くても勝てる筈だ!

町へ向かうと雰囲気が暗かった。きつと鬼に襲われて死者が出ているんだ。とりあ
えず情報収集もかねて飯を食おう。ちよくちよく生えてる植物に聞くのもてだが人前
で話すのもな。町周辺の森にいないのはわかっているから町の中の筈だが。

後周りの人間が俺を見る。うん。俺髪の色緑だったな。そりや目立つわな。さて、さ
りげなく聞いてみるか

「すみません。旅をしている者ですが、初めての町ですので食事処の場所がわからない
のです。教えてもらってもよろしいでしょうか」

「食事処ですか。あそこの道を左に曲がるとあります」

「ありがとうございます」

「いえ……」

「表情がすぐれないようですが、何かあったのですか？」

「いえ、なにも……」

「気のせいでしたか」

だよなあ、知りもしない旅人なんかに教えてくれるはず無いよなあ。

さてと、飯は蕎麦屋。五年間ずっと雑食生活だったからなあ。旨いだろなあ。

「蕎麦一つ」

「あいよ」

「ズズズ」

めちやくちやくそうめえ!! 五年ぶりの人の飯は最高だ！ 葉ーさんの作った飯が

食いたいな。いや、俺が葉ーさんになって作るんだよ！

「そんなに旨そうに食ってもらえるとこっちも嬉しいぜ」

店主だろうか。嬉しそうな言葉を言うが声と表情はどちらかと言うと暗い。

「美味しいです！ この町はどこか暗いですがど何かあったのですか？」

「……ああ、最近人が何人も亡くなっているんだ。まるで食い殺されたように。怖がっ

て日没になったら誰も外にでねえ。皆息を殺している。屋台も夜が本番だというのに一つもない。白い化け物がやったんだ……て、すまないな。気分が悪いことを言っちゃまって」

「いや、大丈夫だ……ご馳走さまでした」

外に出る。そろそろ日がくれる。宿をとつても意味がないな。どうせ次の任務が言い渡される。

夜になる。夜間は誰もいない。人つこ一人いない。町と言うのに本当に静かだ。月明かりしかないのにここまで見えるのも言いな。風情があるような気がする……誰か来る!

「貴方旅人さんでしょ! 夜に出ちゃダメよ! 鬼が出るから、直ぐに入って! 私の家直ぐ近くだから!」

そう言つて女性は俺の腕を引っ張つて近くの家に入れようとする。なんと美しい女性だ黒髪がとても綺麗だ。けれど鬼を狩るために外に出ないと行けない。優しい人だな。それが演技じゃなかったら

「そうやって俺を食い殺すのか?」

「?!」

抜刀して頸を取りに行く。完全には落とせなかったか、あの反応速度、そう簡単には斬らせてくれなさそうだ

「どうやって気づいた！ 私の血鬼術は姿も気配も完全に人間に出来るものよ！」

「目撃者がいて聞いた」

「目撃者?! この町の人間は全員家に籠って出てこないはずよ！」

人は見てなくても植物は見てるんだよ。ただし無惨に知られたらその索敵能力は厄介だと炭治郎同様に狙われる可能性がある。自然界での行動全てに痕跡を残すことになるからだ。だから口には出さない。

「お前の頸を取らせてもらう！」

全集中・葉の呼吸 三枚目 悲しき落葉

「斬るなあ！ 私を斬るなあ！」

なんだこいつ?! 鬼の癖に傷つくのをもの凄く恐れている！

「よくも！ よくも！」

傷が再生している。別に斬られても問題ないのか。なのにあそこまで、痛がっている様子もない。

どんどん白くなっていく？

「血鬼術 魅惑の虚偽身」

もとに戻った。いや、違う。変わったんだ。恐らく攻撃を受けることで血鬼術が剥がれて本来の姿になる。白い姿なのだろう。だが、俺が見ている限り意味はない! 助けてと叫んでも怖がって誰も外にでないのは原因を作ったあいつ自信が一番わかっているはずだ!

「血鬼術! 血鬼術!」

「姿が変わったとしても力が増すとは限らない! 葉の呼吸 五枚目 風揺られの扇・進」

「血鬼術!!」

「?!」

鬼は俺に似た姿に何度も変わる。そして、俺が斬る直前、偶然だった。偶然にも俺の父親と瓜二つの姿になった。咄嗟に腕を止めてしまった。頸を半分まで斬った刀も止まってしまった。

一度止まってしまった刃では頸は落とせない!

「まずい!」

その瞬間、俺の背中は壁に激突していた。

白い鬼

「カハッ！」

痛い！ 凄く痛い！ 肋骨にヒビが入ったかもしれない、折れたかもしれない！ あのやろう！ 偶然とはいえ親父の姿になりやがって！

でも、あつちも怯えた様子だ。怯えたいのはこっちだ！

「スウ、！」

痛い、長男の炭治郎があそこまで痛がるなら俺には耐えられない。が、耐えられるならまだ折れてない。でもヒビは入った！ 呼吸で痛みを和らげろ！

「よし！ 俺はまだ平気で戦える！」

「そんな！ 普通の人間ならこれで死ぬのに！ 私の本気なのに！ 5人以上も食べたのよ！」

これで本気?! 少なくとも五人は食っている。

少なくとも鬼にされた直後の鬼は伊之助の骨を折るほどの力がある炭治郎が本気で取り押さえる程の力がある。なのに、無惨から貰った血が少ないのか？

途中まで斬れた頸の影響でまた姿が戻ろうとする鬼は血鬼術で咄嗟に誰かの姿にな

り、そのあと俺の親父の姿になる。この姿に俺が弱いことをわかっていているんだ！ けれど、何故咄嗟に使った？ 俺までの距離がある。元の姿は白い。目も紅かった。

「化け物め！」

「蕎麦屋のおやつさん?! 危ないから下がってろ！」

何故外に出てるんだ！ 持っているのは、長い棒か？ 包帯か何かで棒に包丁を巻き付けてる。

「俺は見たぞ！ こいつの姿が変わるところを！ 五人も食ったことも聞いた！ お前だ！ お前が娘を食い殺したんだ!!」

「やめろおやつさん！」

「止めないでくれ！ 家族の仇だー!!」

「私は化け物なんかじゃない！」

まずい！ あのままじゃおやつさんが！ ダメだ！ 雷の呼吸でもないかぎり俺の最速の技でも間に合わない！ 俺が間に合わないなら、刀だけでも間に合わせる！

刀を投げる。刀はおやつさんを殺そうとした鬼の手首を切り落としてそのまま奥へと飛んでいってしまう。おやつさんは目の前で刀が横切った為に驚いて一步引いた。

俺はそのまま飛び込んで鬼の両手首を掴んで抑えつける。

「それじゃあ鬼は殺せない！ あの刀じゃないと死なないんだ！ 持ってきてくれ！」

「そいつは家族の仇なんだ！ 俺が殺してやる！」

「素人が刀を振っても斬れないぞ！」

おやっさんは自分で斬るつもりだ！

「血鬼術！」

「無駄だ。どんな姿でも押さえつけられる力は弱めない！」

完治してないから血鬼術が使えず元の姿に戻っていく。それはわかってた。けれど、まさか本来の姿があんな姿だったのか。

「……………」

俺は投げ飛ばされていた。しまったと思った。咄嗟に受け身をとるも既に鬼の手はおやっさんに伸びていた。

逃げる！ そう言おうとした瞬間、おやっさんの持っている棒とは別の棒が鬼の頭を叩く。

「こ、この白いのが！」

蕎麦屋を教えてくれた人！ それだけじゃない！ 町の人達が集まっていく！

「怯えてじゃダメだ！ 目の前に化け物があるのに、旅人さんじゃなく、俺達が町を守らなくてどうする！」

「そうだ！ 自分の町は自分達で守るんだ！」

「こいつが！ 夫を殺した白い化け物！」

「よくも俺の婚約者を！ 白い化け物め！」

「まずい！ これはまずいぞ！ しまった！ 人が集まったら刀を思うように振れない！」

鬼は耳を押さえ、震えている。恐怖を感じているんだ。

「その言葉を口にするな！ 人間なんて全員食い殺してやる！ 醜い姿にしてやる！」

恐怖で早く動けなかった鬼の攻撃に間に合い本気で懲り飛ばす。人混みから外れた鬼に止めをさそうとおやつさんから刀を取ってそのまま追撃する。

「お前も……さつきどんな姿でも力を弱めない。そう言った。でも、私のこの姿を見て弱めた！ 私が醜いから！ この白い姿が！」

「それは勘違いだ。あまりに綺麗だったから、見惚れてた」

見惚れてたからと言って、手加減するつもりはない。

「葉の呼吸 五枚目」

????????????????????

「太陽の下を歩けないなんて、まるで鬼だわ」

「体は真つ白だし、目は真つ赤よ。白い悪魔の子よ」

あれ？ これは、何？ 記憶？ 誰の？

「お前白くて気持ち悪いんだよ」

これ、私だ。人間だった頃の私だ。

「今年も不作だ！ あれもこれもあの鬼の子のせいだ！ あんなのがいるから不幸な事が起きる！」

違う！ 私のせいじゃない！ 私そんな力持つてない！

「こいつ人間の癖に日に当たっちゃいけないんだつて！ 本当か試してみようぜ！」

痛い！ やめて！ 肌が焼けるように痛いの！ お願いだからやめて！

「あの子と関わるのはやめなさい！ へんなのが移ったらどうするの！」

私は変じゃないよ！ どうしてそんな事を言うの！

「ずっと引き込もつて、役立たずの疫病神」

私だつて外に出たいよ！ 遊びたいよ！ どうして！ どうして!! 走り回つて、

転んで！ 泥だらけになって！ 皆と一緒に遊びたいのに！

「あんななんか生まれてこなければ良かった！ なんてこんなのが生まれたの!!」

お母さんもどうして！ 酷いよ！ 私だつて好きでこんな姿に生まれたんじゃない

よー！

「化け物！」

「悪魔の子！」

「あんたなんか村にいただけで不幸なのよ！ さっさと食われればいいわ！」

置いてかないで、やだ！ お母さん！ やだ！

……助けて

「白い人間とは珍しい。特別な鬼になりそうだ」

誰だろう。もういいや。

「私、自分の姿が嫌い」

「私の血を与えよう。新たな姿になれる。その代わり私の役に立て」

その人から貰った血を飲むと、血鬼術で自分じゃない、誰かの姿になった。

「一人も食っていないのに血鬼術……」

その人は今までにない目を向けてくれた。私に期待の目を向けてくれた。でもそれは直ぐに終わった。

「私は思い違いをしていた。お前はただの出来損ないだった。人間の出来損ないを鬼にしたところで何も出来ない」

失望した目で私を見た。村の人たちとは違う、恐ろしい目だった。

それでも嬉しかった。私は私以外になれる。人を食べていけば普通になれる。太陽の下を歩けないのは変わらなかつたけど、普通の生活ができた。

それでもバレては傷つけられて、化け物だと罵られる。恐れられて逃げられる。嫌だった。

「あまりに綺麗だったから、見惚れてた」

初めての言われた。生まれてから一度も聞いたことがなかつた私を褒める言葉。旅人。誰なんだろう。誰も私の姿を誉めてくれなかつた。誰も私を良いと思わなかつた。でも、少なくともこの人だけは、私の事を綺麗だと言ってくれた。見惚れてくれた。だつたらせめて、偽りじゃない、本当の自分の幸福のまま死にたい。

私は自ら頸を差し出した。

「一枚目 深緑の温もり」

鬼の頸は落ちる。その表情は安らいでいた。

「お前は白く美しかった。雪みたいだった。赤い目もルビー見たいで綺麗だった」

「るびー？」

「赤い宝石だ。とてもきれいな」

「そっか、ルビーか、私は雪で宝石なんだあ。初めて言われた。ありがとう」

最後の最後に照れた顔でお礼の言葉を言いながら消滅していった。

今度生まれかわるとき、彼女に不幸な事が起こらないように。

「死んだ、のか？ 化け物は。いや、鬼は」

「ああ、死んだよ」

歓喜の声は上がらなかった。鬼は死んだとはいえ、返らぬ人の方が多い。皆悲しみと向き合いながら礼を言つて、家に戻る。最後に残つたのは蕎麦屋のおやつさんだけだった。

「一つ、聞いてもいいか」

「ああ」

「どうして、あんな必死に殺そうとしたのに、頸を取つた時は情をもつた表情をしたんだ」

「それは、この鬼は鬼になる前、疎まれ、虐げられ、幸せなんてない日々を送っていたからだ」

「どうしてそんなことがわかるんだ」

「病気だよ。この人は生まれつき、アルビノと言う病気だったんだ。白い髪と肌に赤い目。太陽の下を歩けないし目もみえづらい。まともな生活なんてない」

「……」

「それでも、罪のない人を殺したのは許されない事だ」

「俺の妻と娘を殺した。許せない。けれどももう終わった。なら、俺はあの鬼にすることは恨む事じゃない。自分も他人も、幸せにできるような人に生まれ変わるよう、祈ることだ」

「……そうか」

この時代はアルビノは迫害する対象だ。海外なら、魔女狩りとして殺されるだろう。幸せなんてどこにもない。

俺は町を後にした。鎧鴉から告げられる、次の目的地へ向かうために。

禰豆子は醜女じゃない!

「アサクサ! アサクサに行け!」

「は?」

このタイミングで浅草って、なに、無惨のいるところにいけど。困るんだけど。炭治郎見たいに狙われると? 耳飾りないから炭治郎程じゃないとしても、ハードな世界でさらにハードはやめろ。

「よし、別の任務に……いやまてよ!」

ここで炭治郎と出会えれば珠世さんと出会える。俺の血は使えるんじゃないか? 日の光を吸収して蓄えるなら、治療法にも役に立つはずだ。だとすれば、メリットもあるがデメリットもある。自ら珠世さんと出会う機会があれば俺の血は早くから信頼を得て研究して貰える。それに炭治郎と一緒になればかまぼこ隊の一員になれる。危険だが急成長で強くなれる。

「ハヤクシロ!」

「いのででで!! わかった! わかったらやめろ!」

俺は浅草に向かう。前世では浅草は好きな場所だ。自転車で行ったことがある。大変だけど。大正時代の浅草は凄いな。夜でも明るいのか。昔なのに。思った以上に建物が高くない。いや、十分に高いのか。さて、鬼の気配は感じない。植物もみあたらないそうか、今みたいに街でも植物を残そうと故意てきな考えがないんだ。バレることのない目撃者がないのはきついな。とりあえず炭治郎さがそ。屋台どこ？

「まずいぞ、早くしないと。どこだ？」

珠世と会う機会は二回。それを逃せば信用を得られない。そうなれば俺の血はしのぶさんに託すしか……さて、しのぶさんはまずい気がする。うん。絶対にまずい！ 日輪刀食ったことなんて知られたら何されるかわからん！ 絶対に会わなければいけない！

「?!」

今のは、今見えたのは、あの白い帽子は、無惨！ あっちの方が騒がしい。そうだ！ 無惨が鬼にして炭治郎が！ ここで珠世さんと会うんだ！

いやさて、無惨を追いかけられるのも手なんじゃないか？ 無惨は炭治郎と出会ったとき、人間とともにいたのに目がもとに戻っていた。直ぐに人間の目にしていたが、あれは炭治郎が掴んだからだ。無惨の性格からして他のものに後ろは取らせない。それも掴ませることなんてさせないはずだ。驚いたんだ！

それに善逸達が愈史郎の紙で不可視状態で戦ったときも接近に気づいてなかった。

無惨は察知能力が低いのでは？ 意識的なら驚異的で直ぐに不可視を見破った。だが、意識してないなら気づかない。もしかしたら、騒動で自分を追えない。そして俺にも気づいていない。呼吸で気配を薄くすればいける！

俺は無惨を追う。後ろは手珠世の血鬼術で綺麗だが見失わないようにするために見なかった。

「あなた」

「大丈夫。警官に訪ねるだけですから」

人間のフリか、無惨でいいなあ、好きな姿になれて。女性にもなれるし女湯入りほうだげフンゲフン、逃げ隠れするのにうってつけすぎる。

裏路地に入った。葉一たんなら三人を助けようとするがダメだ。今の俺にはどうこうできない。助けられないし殺されるだけだ。諦めるしかない。

「耳に花札のような耳飾りをつけた鬼狩りの頸をもつてこい」

あの二人、えつと、鞠と矢印だっけ、名前忘れた。隠れているとはいえ俺を無視しているとなるとやっぱり気づいてない。さあ、どこへ行く。漫画を途中までしか読んでないじよう情報が必要になる！ 角を曲がった。次の角を左、

人通りが少ない。少し複雑な道だ。いない?! いったいどこに!

「鬼狩りがもう一人か」

「?!」

バレていた?! ヤバイ!

「!!」

「私は今まで鬼狩りに誰一人として見つかることはなかった。しかし今日はどうか? 二人の鬼狩りに見つかった」

苦しい! 咄嗟に腕を出せたけれど指が腕に入っていく! 痛い! まずい! 血を入れられる! くそ! 察知能力が低いと思つて行くんじゃないか! 血

「私は今気分が悪い。今すぐにお前を殺してやりたいが髪と瞳が緑だ。どこか人間と違う。興味が沸いた。鬼にしてやる」

「があああああああ!!!」

苦しい! 体の内側から熱い! 裂けそうだ!

「だが力のあるものは鬼になるのに時間がかかる。中には鬼にならない者もいる。鬼になつたときに貴様の前に姿を現そう」

「ウガオオオオオオ!!!」

苦しい! 誰か! 誰か! 熱い! 死にそうだ!

「大丈夫か!」

「あが! うぐ!」

炭治郎?! だめだ! 珠世さんを連れてきてくれ! 頼む! はや……く?

「はあ、はあ、」

「何があった! 君ら無惨の匂いがする。でも今はしない!」

なんとも……ない? そうか、日の光を蓄えてたからそれが無惨の血を消滅させたんだ。助かった……。

「大丈夫だ」

立ち上がったがフラフラだ。目眩もする。鬼の血になりかけてた血も無くなったんだ。栄養のある土と水があれば……

「フラフラじゃないか!」

炭治郎が方を貸してくれる。

「無惨に血を入れられた。俺は日の光を蓄えられる体質だから何とかになった」

「日の光を?!」

「ただその分血も減ったから、水が欲しい、あと食い物も」

「わかった!」

炭治郎に連れられて来たのはうどんの屋台だった。

「すみません! 山かけうどんください!」

「おいてめえ！ さつき頼んでおいて俺のうどん食わなかった奴じゃねえか！ て、どうしたんだそいつ?!」

「すみません！ 二杯お願いします！ 食べます！ ちゃんと食べます！」

「俺の分は、野菜多めで」

「食うんだな！」

「頂きます!!」

ぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞん！

「ゴ馳走さまでした!! 美味しかったです！」

「おう！ わかればいいんだ！」

生き返ったあ。野菜植物から栄養も取れたし、血も作れた。どんどん葉ーたんに近づいているのがわかるな。

「ごめんな彌豆子。置いてきぼりにしてしまつて」

「さつきはありがとう、俺は翡翠島然葉だ」

「竈門炭治郎だ。無惨の血を入れられたのに鬼にならないって凄いな」

「ああ、おかげで助かった。マジで死ぬかと思つたよ。出来ればもう会いたくない」

「あつ」

彌豆子が炭治郎を止める。目の前には鬼がいた。俺は咄嗟に刀を抜こうとしたが良

くみたら愈史郎だった。

「待っててくれたんですか？ 俺は匂いを辿れますのに」

「知り合い？」

「はい」

「なんだ。なら大丈夫だか、鬼だったから一瞬身構えたよ」

「?!」

愈史郎は見た目が人間だ。そして禰豆子も。と言うことは愈史郎を鬼と気づいた俺は禰豆子も鬼と気づいていると炭治郎は思った。

「鬼とわかってて攻撃しないでくれたのか?!」

「植物たちが言ってたんだ。とても優しい人がいるって。無惨の匂いのする、つまり血を入れられたことに気づいていたにも関わらず頸を取りに行かず心配してくれて助けてくれた。それなのに鬼と一緒にいる。その優しい人って炭治郎の事だとわかったんだ。だから炭治郎の知り合いの鬼もきつと大丈夫だと思っただ」

「知っていたからだけど適当に理由付けした。でも割りと良くね？ 実際そう思ったし。いざ炭治郎の優しさに触れてみると凄いよ。」

「そっか、ありがとう」

嬉しそうな炭治郎。うん。俺、炭治郎の弟になりたい。いや！ 葉ーたんになって炭

治郎の妹になりたい！

「おい、何二人で盛り上がってる。お前誰だ。その鬼も醜女だ」

「醜女のはずないだろう!! 良く見てみるこの顔立ちを! 町でも評判の美人だったぞ
彌豆子は!」

「そうだそうだ! 醜女なわけない! 口枷をつけていてもわかる美人だぞ! お前は

目が腐っているのか!」

「だからお前誰だ!」

知っているからこそその攻略

「おかえりなさい」

「あつだいじょうぶでしたか。お任せしてしまいません」

「この方はだいじょうぶですよ。ご主人は気の毒ですが拘束して地下牢に。ところで、そちらの方は」

「こいつは無惨に血を入れられたにも関わらず鬼にならなかつた者だ。本当かどうか怪しいがな」

「無惨の血を！ ……まだ名乗っていませんでしたね。私は珠世と申します。その子は愈史郎。仲良くしてやってくださいね」

本来なら俺はついていくことは叶わなかつたが無惨の血を入れて助かつたとして、愈史郎が連れてきてくれた。あまり良くは思っていないが珠世さんの事を考えたらそうなつたのだろう。

原作どおりの説明をうける。だが原作と違うのは俺がいることだ。

「然葉さん、無惨に血を入れられた時の事を詳しくお聞かせ願いませんでしょうか」

「はい。血が入ったとき、」

「まずい！ ふせろ！」

いきなり家が壊れた?! いや違う！ 毬だ！ えつと！ 腕が六本のやつと申し訳ないけど気持ち悪いやつ！

「キャハハ。みつけたみつけた」

「愈史郎さん！」

不自然に毬が曲がる！ 矢印が見える?! どういう事だ！ 何故見える！ 愈史郎の目を貸してもらわないと見れない筈だ！

「炭治郎！ 矢印だ！ 矢印の通りに見れば対処できる！」

「矢印?! そんなものは見えない！」

「見えないなら俺の視覚を貸してやる!!」

「愈史郎さんありがとう！ 俺にも矢印見えました！ 然葉！ 木の上だ！」

「葉の呼吸 二枚目 虫食い黄葉！」

だめだ！ 少し距離があつたから斬り落とせてない！ 矢印を食らう前に一回引く！ いや違う！

「土埃をたたせるな！ 汚らわしい！」

「風揺られの扇！」

「よけた?!」

危ない！ 体も流れるように捻りを加えてなければ当たってた！ 頸は取れなかったが左腕は切り落とせた！ 片腕だけじゃ回数は減る！

「よくも腕を地べたに！ 許さぬ！」

しまった！ 目を閉じたのは左手、右手は今閉じられた！ 体が引つ張られる！ 技を出さないと！

「四枚目 咲いた葉鞘・芯！」

いつてえ！ この技受け身にも使えて良かった！ 炭治郎がすごく痛い！ と評価するだけはある！ 俺もすごく痛い！

けれど毬の方はこれで矢印は使えないし炭治郎と禰豆子で戦える！ 俺も攻略方法を知っている！ 勝てる！ 炭治郎が陸と参と型の応用、弐の型で倒した！ 偶然だ。俺も三と六枚目の応用だ。

「もうお前の血鬼術は見切った！ 次にお前の頸をとる！」

「汚ならしい小僧が！ やってみろ！」

大量の矢印があらゆる方向からやって来る。

「三枚目 悲しき落葉」

枝別れするような動きで矢印に合わせろ！

「六枚目 魅惑の花吹雪」

矢印を花卉と共にのせろ！ 舞え！ 刀が重い！

「ぐおおお！ 五枚目 風揺られの扇・強風!!」

頸を取った！ 舞うように動くからその分威力が低い魅惑の花吹雪。炭治郎と同じよう向こうの攻撃を利用してやったぜ！

「おのれ！ おのれ！ あいつの頸さえ持ち帰ればあの御方に認めていただけたのに!! 許さぬ！ ゆるさぬ！ 汚い土に俺の顔をつけおつて！ お前も道連れじゃ!!」

「葉の呼吸 七枚目 緑白光!」

葉の呼吸の高速最大威力の突き技。矢印を真つ直ぐに乗せたことにより、全ての矢印が同じ方向になる。だが、一つ目の矢印さえそうなればよい。矢琶羽は方向を調整しなかった。もう消滅するからその余裕がない。その為、俺が矢琶羽に向かっていることに気づけなかった。矢印の力を加えた緑白光は矢琶羽の両手を貫く。

「矢印が！ おのれ！ おのれ！ おのれ！ 道連れじゃ!! 道連れじゃ!」

血鬼術に必要な手が無くなった。矢印は消えた。俺を睨む矢琶羽。叫ぶだけでも何も出来なかった。消滅する直前、最初に切り落とした腕の血を水筒にいれる。最後まで睨んで消滅した。

俺は勝った。炭治郎の時より軽傷で。だがそれはあくまでも原作を知っていたから。そこから攻略法を見つけ、炭治郎の真似事、そこからさらに先を考えただけに過ぎない。

だがそれがどれだけの力を持つか、とても大きいものだ。

建物に戻ったら、朱紗丸の頸を斬った炭治郎がいた。ほら、軽傷だ。重症から軽傷になっっている。もしもこれが死から重症になったら、しのぶさんやレンゴクさんも助かる。重症から軽傷だったら、ド派手な人も無惨戦に参加できる。知っているだけで、少しでも良い未来が探せる。

炭治郎は毬を求める彼女に慈悲の心を持つ。

「炭治郎。そつちも頸を取れたんだな」

「取れた……けれど、無惨の事を聞いたらこの人は慕っていた。けれど怯えていたんだ」
「鬼舞辻の呪いのせいです。あの鬼の名前を呼んでしまったら、鬼舞辻の細胞が鬼の体を破壊し殺します。鬼同士の争いは不毛ですが、鬼舞辻は鬼の細胞を破壊できます」

「……」

「こいつらは十二鬼月じゃない」

「?!」

「目に数字がない。の筈ですよ、珠世さん」

「そうです」

珠世さんは血をとる。それから建物の地下へと移動する。

「珠世さん。戦いの前にも言った通り、日の光を蓄える体質です。無惨の血も消滅しました。しかし、ただ消滅しただけではなさそうです」

「?!」

「鬼の視覚を借りなければ炭治郎は見えなかつた矢印が俺には普通に見えました。いくら特異体質と言えど鬼の術は鬼じゃないとわからないはずです。禰豆子が二年間の眠りで変化したように、俺の体も変化している可能性があります。幸い俺は軽傷で血を流していません。影響が出ない程度に血を抜き取ってください」

「……わかりました。ところで、先程から禰豆子さんがこのような状態なのですが、大丈夫でしょうか」

禰豆子が珠世さんを抱き締めて愈史郎を撫でる。その直後の炭治郎の言葉に珠世さんは涙を流す。

禰豆子は人間が家族に見える暗示がかかっている、それでも鬼の珠世さんと愈史郎を家族と認識した。

禰豆子を珠世に預けるか問われた。けれど、二人は一緒にいることを決意した。

その後、水と栄養のある土を用意して俺の血を抜いた。葉一たん程ではないが急速に血は作られたために結構の量を提供出来た。傷付いた体を手当てして出発する。

「なあ炭治郎。俺は禰豆子に人間と認識されているのだろうか。明らかに対応が違うよ

うな」

禰豆子に髪を引っ張られたりしてる。弱い力だ。だが続けられるとブチっていつちやうんだが。

「止めるんだ禰豆子。その人は植物じゃない！」

「俺の髪を山菜か何かと間違えているのか。体質と呼吸のせいだなこりや。あ、寝ちゃった。気持ち良さそうに寝ているな」

「然葉に触れたから癒されたんだろう」

「？」

「然葉からは癒されるような優しい匂いがするんだ。心を落ち着かせてくれる。気のせいか痛みも少し和らぐ気もする」

「そうなのか？ 他人にも影響するのか。より癒し効果のある深緑の温もりならどうなるんだろう」

呼吸を試みる。

「あっさらに匂いが強くなった。痛みも引いていくよ」

「鎧鴉が肩に止まって眠ってしまった」

「本当だ」

再開

次の任務は炭治郎とは別だった。三人も屋敷に向かっていつているのだから仕方がない。

俺の呼吸が他人にも影響ある。癒しの効果だがそれは鬼にも言えるのが困るな。ただ禰豆子は直接だったし、炭治郎は匂いだったから、何らかでの察知能力が必要だな。そんなことは置いといて。

「鎧鴉。本当にここだろうな」

「ココ！ ナンナントウ！ モクテキチ！」

「一軒屋敷付近っていつてなかったっけか。見る限り森しか無いぞ。もう夜だぞ！ はあ、すまない。ここらへんに屋敷はないか？ 俺たち道に迷ってさ」

『人間が僕達のことわかるの？』

「ああ、逆に言えば俺しかわからないけど」

『へえ、凄いね。屋敷なら西だよ。でも危ないよ』

「危ない？」

『鬼がいる』

「俺は鬼狩りさ」

『ならお願いしていい?』

植物からのお願ひ。内容は単純に鬼を退治して欲しい。初めての内容だった。いつもなら水が欲しいとかそんな感じ。鬼なんて植物には殆ど関係ない。けれどその鬼は自分の血を植物にかけて枯れさせているらしい。嫌で重い空気だと言う。

あつた。ここが一軒屋敷。この付近だが、確かに植物が一部枯れている。変色している。少し気持ち悪いな。

「俺は鬼狩りだ。ここら辺の植物を枯らしている鬼を退治しに来た。どこにいるか詳しく教えてくれないか」

『沢山の枯れた植物を抱えてあの屋敷の中に入った! 同じ格好の人が追いかけた!』
「その人も同じ鬼狩りだ!」

鬼殺隊がいるのか!

直ぐに屋敷に入る。埃が舞っていたりと何年も人が住んだ形跡はない。今さつき荒らされた形跡はある。

慎重に行こう。わざわざ枯らした植物を持ってきているんだ。

ドアを慎重に開ける。いない。いや、右の廊下から足音が! 鬼の気配。呼吸で気配を薄くしてあの曲がり角にさしかかった所で頸を落とす! 今だ!

「なっ?!」

「え?!」

「はっ?!」

同時だった。鬼の頸を斬ろうとした瞬間、天井を突き破って上から鬼殺隊の服を来た人が現れて同じく頸を斬ろうとしていた。その刃同士がぶつかり、落下の勢いそのままに俺に落ちて鬼はその隙に逃げた。

「いた!」

「痛いのはこっちだ! 早く退いてくれ! 重い!」

「重いとは何! 失礼ね!」

「いで!」

上に乗つかられてさらにげんこつって、なんだこの理不尽な奴は! 声的に女性だけど! どこか聞き覚えあるけど!

退いてくれると立ち上がる。女性は不機嫌そうな顔だ。どこか見覚えもある。髪も紫だ。

「貴方のせいで鬼を逃したじゃない」

「……………」

「どうしたの? そんな驚いた顔して…………おーい」

「思い出した!!」

「いきなりどうしたの?!」

「俺は貴女に救われました! ありがとうございます!」

「え?! いつ?! 貴方みたいな緑の髪、会ったなら覚えたいと思うんだけど」

この人は、数年前に俺を助けてくれた人だ。刀をくれた人だ。一週間だけけど、心の支えになつてくれた人だ。会えた。まだ名前聞いてなかったし。

「貴女と話したいことがあるんですが、今は鬼が優先ですね」

「気になるんだけど?! でもそうね。あの鬼、すばしっこくて厄介だから」

「わかった」

鬼を探す。それにしても二回から床を突き破つて奇襲とか、とんでもない事をする人だ。それにしても親近感を覚えるのは何故だろう。

「鬼の気配がする」

「ああ」

あの戸の向こうだ。

アイコンタクトを取ると戸を蹴り飛ばして一気に入る。

「?!」

体に力が入らない?! 気持ち悪い! 立つてられない!なんだ! いきなり気分が

悪くなった！ この部屋、枯れた植物が沢山ある。まさか毒系？！

「大丈夫?! まさか、毒！」

「おいおい、いくら何でも効くのが早すぎる」

鬼がいる。あつちも驚いている。本来ならもつお遅いのか！ ともかく呼吸を！

「うっ！」

だめだ！ 手で口を押さえないと吐きそうだ！ 呼吸ができない！ まずい！ 今

すぐ部屋からでないとい!!

「毒があるなら直ぐに出ないとい！」

女性は俺を抱えて部屋からでる。鬼は追いかけてこない。おそらく毒が聞いてから倒そうと考えていたが俺が俺があまりにも早く効いたからもう一人がまだ効いてない。

「すまない……部屋から出たらだいぶマシになった」

いや、本当に毒なのか？ 部屋から出ただけで回復するか。おかしい。鬼のせいじゃない？ 枯れた植物が沢山ある部屋……まさかな。

「恐らく気分が悪くなったのは毒のせいじゃないです。枯れた植物が沢山あったからだと思う」

「どういふこと？」

「植物の特異体質がある俺にとっては有害なんだと思います。呼吸も葉なので」

「私も特異体質だけど、まさかそんな弱点が、私にも特別な弱点があるかもしれない。気を付けないと」

女性は俺を下ろす。

「あいつをあの部分から出せれば貴方も戦える。私に任せて」

頼りになる人だ。少なくとも、床をぶち破れるだけでも相当な力。あの人がどんな戦い方をするのか見れる。俺の恩人は、どんな人なのだろう。

女性が再度入ると抜刀せずそのままグーで鬼を殴る。鬼も日輪刀ではなかったが為にバカじゃないの？ と言いたげな顔でくろうが頸がぶつ飛びそのまま壁ごと破壊した。

「はあ?!」

ちよつと待て! どこからあんな力が?! 筋肉もりもりでもないのに! 特異体

質っていつてたけどもしかして甘露寺さんと一緒の体質なのか?!

「こいつそこらの鬼に負けないぐらいの力があるのかよ!」

「残念だけど私に毒は効かないわ! だからこんなものなんて捨てちゃえ!」

「ああ! 止めろ!」

枯れた植物を捨て始める、少なくなれば俺も入れる! それにしても随分と遠くに投げるな?! どこに落ちたか見えなくてわからないよ?!

「いくら毒が効かなくても限度があるだろ！ 毒血・身蝕腐毒の殺
鬼が血を直接女性にかける。」

「まずい！ いくらなんでもあの量は！ ただでさえ鬼の血はそれだけでも有害なの
に！ ちくしょう！ まだ枯れた植物が多い！」

「効くかー！」

「ぼぶあ?!」

そのままアツパーで鬼をぶん殴ると天井に穴を開けてそのまま二階までぶつとばす。

「……部屋から追い出したよ！」

「追い出したって言うか、ぶち破った?!」

そんな後は任せたような顔しないで?! そんな強いならそっちでとどめさしてよ！

いやまあ戦いに行くけど！

「葉の呼吸 二枚目 虫食い黄葉！」

天井を切り裂いて二階にいく。すると二階の天井に鬼の頭が突き刺さってぶら下がっていた。直ぐに抜くと窓を割って逃げる。

「あつ！ 待て！」

「待つか！」

そのまま建物を出ると森に出る。しばらく追いかけていく。

「鬼狩りを二人同時は無理だが一対一なら鬼の俺が勝つ！ 毒血・身蝕付毒の生！」
血を辺りに撒き散らした?! しまった！ 辺りの草木が枯れた！ これ以上近づいたらまたさつきみたいに！

「まずはあの女からだ。特異体質の人間は食うと希血ほどじゃないが栄養があるんだ」
「追い付いた、てまた枯らしてるの?! また吹っ飛ばしてもまた枯らされるだけ、なら私が頸を取るしか……」

「さつきから思ってたんだが、そんなに力があるなら頸を斬りにいけばいいんじゃないか」

「体質の影響で刀を上手く握れなかったり、剣技がダメになったりで頸をなかなか落とせないの。いつも粘ってるけど」

なるほど、だとすると植物の被害が多くなる。粘られたらそれこそ広範囲に血をばら蒔かれる。だがここは森だ。枯れ木しか無いわけじゃない。

「刀を貸してくれ」

「二刀流で何かをするの?」

「ああ、枯れた所でも突っ切れるかもしれない。匣を頼む」
「任せて」

「後名前。まだ聞いてなかった。俺は翡翠島然葉」

「私は李慈露虹霓」

刀を受けとると自身のも抜刀し構える。虹霓が鬼を引き付ける。俺に背中を見せた瞬間、このタイミングだと思った。

「葉の呼吸 双葉 緑暴風」

二つの刀を回し風を起こす。木々の葉っぱが舞い俺と共に回転しながら一気に頸を斬りにいく。

枯れた植物の近くにいるから気持ち悪くなるのなら、生きている葉っぱと共に進めばいい。

光輪刀の誤法

「くそ！ 頸を取り損ねた！」

緑暴風は威力のある型、だけど狙った場所を斬る型じゃないから頸を斬れなかった。まずい！ 毒血が！ 緑暴風を止めずに血を吹き飛ばすか？ いや駄目だ。周りに血が飛び散ってさらに木々が枯れる。しかも近くにいる虹霓をほぼ確実に巻き込む。

「ぐっ！ がはっ?!」

枯れた所を脱出したけど血がかかった。蓄えた日の光で毒は消えるが少なからず影響は出る。が、ここまで苦しいなんて！ 吐血もするほどだ！

「頸を斬つてよ！」

「すまん！ 無理だった！ 日輪刀返します！」

「敬語もまちまち出し、やっぱり会った覚えがないよ！」

「俺の毒は皮膚からでも体内に直接入っていく。だがお前らともに毒が効かねえな。ち、結構な量の血を失ったから、嫌でもめえらを食わねえとな」

日輪刀を投げて返す。虹霓は受けとると鬼の頸を取りに行く。思いつきり刀を振るが避けられる。刀を持ってない方の腕と両足で鬼を攻撃するも全て防がれた。

「嘘?!」

「力ある体の使い方わかってないな。鬼はこうやるんだよ!」

鬼は虹霓の心臓に爪を突き立てて刺す。虹霓はそのまま後ろへぶつ飛び腹から血を流す。

「虹霓!」

「だい……じょうぶ! 力を入れたから心臓には達してない! いたた! 肋骨折れたかも!」

「肋骨は俺も折ってるから大丈夫!」

初任務で折ってからずつと痛かったよ! でも無惨の血を入れられた時の苦しみに比べたら可愛いもんだから耐えられてんだよ! 俺は葉に近づいているから耐えられてんだよ! 他の体質や呼吸だったら耐えられなかった!

「あのやろう! 動かない気だ!」

血を失って傷を治すのに力を使っているからさらに血を撒き散らそうとは考えてないが、それでもきつい。鬼は体術とかはやってる様子はないけど、喧嘩なれしてやがる。的確に心臓を攻撃しようとする所がそうだ。

「痛いけど頑張るしかない! 私には鬼殺隊李慈露虹霓! 肋骨だろうとなんだだろうと折れながらやれ! 私はお姉ちゃんだ! 兄を負かしたお姉ちゃんだ! 水の呼吸 壺

の型 水面斬り！」

虹霓は炭治郎タイプだ?! と言うか呼吸使えたのか。ダメだあれじゃあ! 予備動作が長すぎる! 体質で力があるからその分剣技も不安定になるって言った。確実に技を出すにはどうしても予備動作が長くなるんだ! 対応された! 簡単に避けられた。まずい! あのままだと同じところを攻撃されて今度こそ心臓を刺される!

「やめろ!」

「くそ!」

突っ込んで勢い任せて刀を振ったから腕を切れた。だけど気持ち悪い! 鬼の血がかかるのに逃げられない!

「こうなったら最大濃度の毒で殺してやる! 毒血・生死不動の毒!」

くそ! 少なからず効くからゴリ押しで殺しに来やがった! 動け! 転がれ! だめだ、力が出ない!!

「歯くいしばって!」

「がっ?!」

痛い! 虹霓が蹴り飛ばしてくれたおかげで助かったけどさらに肋骨が折れた! それでも僅かに血がついた!

「あっ! があ!」

苦しい！ さつきとは比べ物にならない！ 体の中が熱い！ 溶かされてるみたいだ！ 耐えろ！ 耐えろ！ 刀を握れ！ 俺は葉一たんと同じだ！ 強い！

「この程度に俺は負けない！」

冷静じゃなくなっていた。耐えるために、維持でも攻撃する為に、日輪刀を握り、力を込めて本気で投げた。日輪刀はまっすぐに、鬼の頸に刺さり、頸をおとした。

普通ならあり得ない。刀の細さを考えれば誰でもわかる。頸は斬らなければ落とせない。しかし、さらにありえない事が起きていた。

「日輪刀が……」

「光ってる」

そのまま奥の木にまで刺さると光は消えた。鬼はそのまま消滅していった。

何故かはわからなかった。しかし、左右の肋骨を骨折。毒による身体へのダメージにより頭が回らない。

「ねえ、いったい何をしたの？」

虹霓が聞いてくる。

「わからない」

何でだろう……刀が光ってるし適当に光輪刀の誤法とでも名付けれるか。

「キュウソク！ キュウソク！ チカクニフジノカモンノイエアリ！ フシヨウニツ

キカンチスルマデキュウソク！」

「やつと休息か」

「痛い、もの凄く疲れたよ。痛い」

ねえ、負傷につきつて言うけどさあ、俺一つ目の任務で既に骨折してるんだけど。どうして今言うの？ どうしてもつと早く言ってくれないのか？

「てことは、そこまで歩かなきゃいけないのか」

俺達は重症の体で歩く。

「気が重い……然葉から色々と聞きたいけど今は気が紛れる事が聞きたい」
「知ってるか。ガラスつてどうみても個体だけど実は液体なんだ」

「嘘?! いたたたた！ 痛い……驚かないのでお願い。肋骨が……」

「腕を広げると右手の先から左手の先までの長さは丁度身長と同じになる」

「へー、今度計ってみよ」

「人間にも実は尻尾がある。尾てい骨と言って動物の尻尾と同じ骨。小さすぎて実質ないの一緒」

「尻尾してる人とか想像したくない」

お姉ちゃん

「日の光を蓄える体質になったのはいつ？」

「三週間前だね」

「日輪刀が届いたのは？」

「三週間前」

「私の日輪刀はどこに言った！」

「君のような勘のいい人は嫌いだよ」

「やりやがったなこのやろう！　新しい日輪刀が届くと知って！　私の日輪刀を食ったかなにかしたな！」

「そこに可能性があるならやりたくなくなるだろう！　虹霓も特異体質ならわかるだろう？」

「虹霓もどれぐらい毒の強さや量があれば力が上がるのか。同じだ！　虹霓も俺も！」

「この後全力で謝罪した。今は藤の家紋で休暇です。俺があのと時の人だと教えたらびつくりされました。髪の色が違う時点で驚くわな。」

「食事の用意が出来ました」

「わかりました」

二人で食べる。久し振りにこんなに旨いの食った気がする。浅草でうどん食ったか。ずっと自然育ちだったから、こういう食卓のご飯は旨い旨い。

「だいぶ治ってきたね」

「俺は明日には任務かな」

「完治するの早くない?!」

「いやあ、体質のおかげで栄養のある土と水があれば怪我が早く治るんだ」

「ずるい！ 私なんて毒があっても治りが遅くなるだけなんだけど！」

「なんやかんやで虹霓とは仲良くなった。敬語もいらぬ程度には。」

「そう言えば私はお姉ちゃんだ！ とか言っていたけど弟か妹がいるのか？」

「いや？ いないよ？ いるのは兄」

「は？」

え？ どういうこと？ いないって、じゃあ私はお姉ちゃんだ！ てなに？ 兄を負

かしたとも言ってたけど、どゆこと？

「毒で強くなるって言っても、拒絶反応だからどうしても痛みや痺れとかが伴うから、最初は苦しくて耐えられなかったの。だから兄より強い私は耐えられる！ と思っただけで無理で、どう考えれば良いのか迷ってたらもし私に弟か妹がいたらって考えたら

私を守らなきゃって、兄より強い私は心強いお姉ちゃんだ！ 頼りになるお姉ちゃんだ！
！ て思ったら耐えられるようになったから、とても痛い時や苦しいときは声に出して
意地を見せてる感じかな」

苦しみや痛みを伴うのか……戦ってる間、それも毒が強ければ強いほどに痛みや苦しみ
みが伴う。平気になるには、どれほどの苦痛を味わったんだろう。剣技がダメになるの
もわかる。

……ん？

「実は妹がいない？ 仮にいたとしたらその人は血の繋がっていない他人。 紫髪？

お姉ちゃん？ 毒？ 一週間世話をしてくれた？ 虹霓？」

「どうしたの？ ぶつぶつ言ってる」

「あ——————!!」

「いきなりどうしたの?!」

俺は、俺は！ とんでもない人が今日の前にいる！ ここまで共通点が多いなんて！

これは！ 言うしかない！

「これからはお姉ちゃんと呼ばさせて頂きます！」

「ええ?!」

この人はまさに虹霓文花だ！ 俺はまさに瀬笈葉だ！ これは姉弟きょうだいになるしかない

！ いや、姉妹になるしかない！

「……………」

「あれ？ おーい」

お姉ちゃんが固まった。表情が虚無感になってる。流石にまずかったかな。確かに、実際まだ三週間しか会ってないし。でももう俺の中で虹霓がお姉ちゃんにしか認識できなくなった。

「もう一度」

「？」

「もう一度、言ってくれない」

「お、お姉ちゃん」

「……………」

なんだ、表情が虚無感で何もわからない。良いのか？ 悪いのか？

「お姉ちゃん…………お姉ちゃんかあ、えへへ、私はお姉ちゃん。もう一度お姉ちゃんって言ってほしいなあ」

「お姉ちゃん」

「良く言えました」

緩んだ顔で俺の頭を撫でる。この瞬間、一人っ子でコミュ症前世、自然暮らし一人っ

子の今世の俺に人生初めてのお姉ちゃんからよしよしされたことにより、俺の甘えたい欲望が爆発しようとした。しかし、それと同時に葉ーたんが脳内に現れる。葉ーたんは強くなったとき、誰かに甘えただろうか、いや違う。誰かに支えもらった。隣に立つてもらった。

欲望と葉ーたんが頭のなかでグルグルして、俺がたどり着いた結論は。

「……」

虚無。。。。

「はっ?!」

「いつの間にか布団で寝ている!」

「あ、元に戻った」

「……?」

あれ? 何か布団近くね? 何で同じ部屋で寝ているんだ? 男女が一緒の部屋は

まずいからって別室で寝てなかったっけ? 俺ら。

「いきなり表情が無になって、何の反応もしないし、びっくりしちやった」

「人生初めての姉に、あまりにも感動して……感動を通り越して無に達した」

「え、お姉ちゃんと呼んでくれないの」

「そこまで悲しい顔する?!」

「呼んでくれないんだ」

「お姉ちゃん!」

一瞬にして満面の笑み。ヤバイ。今気づいたけどこの人美人だ。お姉ちゃんじゃなかったら性欲が爆発してた。お姉ちゃんだったから異性として見なかった。

その日は寝た。久し振りに東方自然愈の夢を見た。前世では何週もしたゲーム。だから鮮明に覚えている物語。主人公である葉が、お姉ちゃんである文花を退治する場面。文花が嘘をついて、妹である葉に退治されようとする場面。瀬笈葉と言う存在に近

づいている今世の俺はたまに葉が隣にいてくれるような錯覚を起こす。俺の中では生きて存在として認識してしまっている。その為、悲しいと泣いていた物語が今では耐えられない物語に感じて、夜中に目を覚ました。

目を擦らなくてもわかる。泣いていた。

「大丈夫？ うなされてたけど」

優しく、心配そうに声をかけてくれる。もしも、瀬笈葉と同じお姉ちゃんを倒すことになったら。お姉ちゃんが鬼になって、俺が頸を取りに行くことになったら、そう考えると、体が震える。絶対に足がすくむ。仮定の話で震えているのだから。止まらない。

俺は夜中に起きたらまた寝ても同じ夢かその続きの夢を見る。物語を知ってるから、それを見るのが怖い。

「大丈夫。大丈夫。安心して」

虹霓が俺を抱き締める。安心させるために。

暖かい。震えが止まった。

俺自身は弱いんだ。自分は瀬笈葉だと言い聞かせてたから強がただけなんだ。弱いから、泣いてしまう。甘えてしまう。でも今は甘えたい。この温もりを感じていたい。

心から素直に甘えると、自然と眠りについた。心地よい夢を見た。

次の日。お姉ちゃんとは文通の約束をし、任務へ出掛けた。その先は、那田蜘蛛山。入る前に十人の鬼殺隊と合流した。

足がすくむ。このタイミングでこの山。つまり、十二鬼月の一人、累。この人達は、村田さんを除いて全員死ぬ。

助けられるだろうか。弱い俺に……いや、俺は瀬笈葉だ。強い瀬笈葉だ！ やつてやる！ 全員助け出してやる！

那田蜘蛛山

「階級癡、翡翠島然葉です」

「俺は村田、劍士がこんなにも集まって、那田蜘蛛山ってそんなにヤバイ鬼が出るのかな」

「六体はいますよ。家族みたいです」

「六体もいるのかよ?! 何でわかるんだ?」

「俺葉の呼吸なんで植物と会話出きるんですよ」

「植物と会話?!」

俺と村田さんの会話を聞いた他の劍士達が興味をもって色々と聞いてくる。植物は素直な者が多く何かを聞いても教えてくれる。青い彼岸花だけはどの植物も沈黙するか知らないと言う。たまに水をお願いされることもあれば過剰に荒らす者を退治してくれとお願いされることもある。ただ、踏まれるや摘まれる事は気にしない。むしろ花達は摘まれて花束等にしてもらうことを喜んだりする。

植物の事を話した。劍士たちには評判が良かった。その為、今回の索敵等を任せられた。皆が皆信用してくれたのは嬉しい。

山にどこにどのような鬼がいるか聞いてみる。場所も教えてくれた。とても臭く毒を使う鬼が植物を溶かしたりできるので退治してほしいとお願いされた。まあ善逸がどうにかしてくれるだろう。

ただ、どういうわけか十二鬼月はいないと聞く。目に数字の書かれた鬼がいなか聞いても「いない」と言う。数を聞いても六体だ。

”累”兄”姉”父”母”頸無し”

数は会はず。特徴も一致している。なのに何故いないんだ？

「鬼は六体。糸を使う見たいです。糸も小屋を吊り上げる程に強力で、糸が絡まったら動けなくなりまずし、場合によっては操り人形になる可能性があります。糸が見えなくても空振りをするのをオススメします。後、糸は蜘蛛がつけようとする見たいです、気をつけてください」

「そこまで細かく把握できるのか、とにかく糸に気を付ければいいんだな鬼は六体。一体につき二人で行くのか？」

「言え、一体一体は離れているみたいなので。ただ、全ての鬼が似たような姿で、”家族”見たいです。普通の鬼ではない事は確かです」

「へ、離れているのなら全員で斬りにいけば楽に頸を取れるぜ」

サイコロステーキ先輩この隊だったのね?! 顔見ただけでらいそうだ。確かに、炭治

郎の前で森に戻された一人、操られていた七人、村田さん一人、サイコロステーキ先輩一人、合計十人だ。

皆いつも以上に警戒してくれているだろう。神経質になつて、けれど、糸がある以上神経質にならないと大変な事になる。

山に入る。暫くなにも起きない。蜘蛛を見つけた瞬間に斬っているし空振りしている。時々確認すると斬れた糸が確認できた。

「憶測ですが、糸を張るのでは無く直接つけに来ていると言うことは、鬼は糸を直接操れる可能性があります。恐らく、操つて鬼殺隊同士で斬り合いをさせるためだと思います」

「なるほど、そうなれば頸を取られる心配もない」

「はい、糸で操るなら当然近い方が精度も高くなる。その鬼の頸を斬るのは呼吸を使えるもので後は糸に専念してください。俺は頸を取りにいきます。他に呼吸を使えるものはいますか？」

誰も返答がない。え？ マジ？ 十人もいるんだよ？ 一人ぐらい使えても良くないか？

「俺一応水の呼吸だけど、呼吸が薄すぎて水が見えないんだ」

「え？ 本当すか？ 他の皆さんも？」

「村田さんの言葉に全員が同意する。マジで一人ぐらいいろと思つてた。水の呼吸は初心者でも使いやすい育手が複数いるほどポピュラーな呼吸だよ？」

「水面斬りは……」

「できない」

あ……：斬り合いをさせた鬼は伊之助と炭治郎の二人でどうにかしていた。俺一人で何とかなるのか？ いや、斬り合いにならなければ。

「糸を斬り会えば全員で行けるだろ。その鬼をさっさと斬つちまえばいい。糸を操るつていつても全員が全員人を操れるほどの精度を持つてる筈がない。それに人を操れるなら両手を使う筈だ。懐にはいつちまえば頸は簡単に斬れる。それに居場所はわかつてんだろ？」

「ぶふおー！」

「俺の顔見て笑つただろ！」

確かにそうだが、割りと頭きれるやつだな。何故人柱になつたし。うざつたらしいな。助けられるよう努力するけどさ。だがそうかもな。十人全員が五体満足、行ける。糸は任せよう。

「鬼は向こうです。行きま」

『何か来る！』

『大急ぎで来る!』

『来る!』

「?! 何か大急ぎで来てます! 警戒を?!」

その瞬間、サイコロステーキ先輩が輪切りステーキ先輩になった。

「ひい! こいつ頸が無いぞ!」

「頸がない鬼?! どうやって切るんだよ!」

「一人やられた! あの鬼の腕ヤバイぞ!」

「いきなり来るなんて! そうか! あっちも蜘蛛でこちらの場所をわかっているのか

!」

俺がいたせいで誰も操ることができなかったから痺れを切らして頸無し鬼を出してきた! どうする? 頸の付け根から脇の下まで斬れるが、そこまでの広範囲他の剣士に斬れるか? 俺が斬るとしてもこの攻撃を耐えきれるか? どうする!

「く!」

動きは単純だから上手く受け流せるが、仲間が殺られた上に頸無しの出現で他の剣士が混乱している!

「こ、こいつ糸で操られてる! きつと一人では動けないんだ!」

「糸? そうか! 俺がこいつの攻撃を引き付ける! 他の皆は糸を斬ってくれ!」

「わかった!」

ナイス村田さん! 一つ一つ対処するんだ!

「葉の呼吸 四枚目 咲いた葉鞘!」

腕は刃だが刀で受け流せば問題ない。懐に入れば既に攻撃をした直後、腕を切り落とす!

他の剣士が頑張つて糸を斬る。すると頸無しはその場で倒れ、動かなくなる。

「よっしゃあ! 動かなくなつた!」

「まだ油断しちゃダメだ。確実に止めを刺さない」と

「でもどうやって」

「頸の付け根から脇の下まで斬ってみよう。広範囲なら弱点を斬れるかもしれない。ただ硬いこいつ。然葉、頼めるか」

「わかった」

斬ると鬼は消滅した。よし、サイコロステーキ先輩及び輪切りステーキ先輩は殺られたけれど勝つた。まって、不謹慎だけどあの顔が思い浮かぶだけで笑いそう。ごめんね、ただでさえ短い人生をさらに短くしちゃつて。

「逃げて!」

直後に声がする。驚いて後ろを振り向くと女の剣士が刀を振り下ろそうとしていた。

しまった！ 反応が遅れた！ 他の剣士も反応できてない！ 全員が油断した！ よりにもよって一番後ろにいる剣士！ 間に数人、間に合わない！

「しまっ?!」

刀が振り下ろされた。その瞬間、その女の剣士の目の前に現れて刀で受け止める。

あの背中に背負った箱は、まさか！

「鬼殺隊同士で刀を振るのはご法度だ！」

「ち、ちがうの！」

俺が糸を斬ると女剣士は脱力してその場で膝をつき。腕を下ろす。

「ありがとう炭治郎。彼女は糸で操られていたんだ。助かったよ」

「そうだったのか?! すみません！ 御法度とか言ってしまい！」

「い、いえ、おかげで助かった。ありがとう」

炭治郎がいるってことは

「猪突猛進！ 鬼はどこだあ！」

「今さっき斬った」

「んだと?!」

伊之助だ。猪の頭被ってるの生でみると結構迫力あるな。皆ビビってるし。わかってなかったら俺もビビってた。多分大声あげてた。

「然葉も来てたのか！」

「炭治郎！ 向こうにう鬼がいる！」

「わかった！」

「ウハハハハハ！ 鬼は向こうだな！」

「伊之助！ 先に行くんじゃない！」

「おい待て！ その鬼は糸を！」

「猪突猛進！」

「話をきけえ！」

伊之助を俺と炭治郎が追いかける。そうだ！ ホワンとさせれば良いんだ！ 俺の呼吸は癒しの効果がある。触覚が敏感な伊之助なら感じ取れるはずだ！ 葉の呼吸 深緑の温もり！

「……」

ピタリと伊之助が止まる。

「伊之助、あの鬼は人を操る糸を使う。気を付けないと」

「うるせえ！ お前から何かホワホワする感じがするんだよ！ あとなんで俺の名前

知ってやがる！」

「それは俺がさつき伊之助の事を呼んだからだ！」

「紋次郎からもホワホワするんだよ！」

「炭治郎だ！」

「ひっ！」

怯える声をあげたのは鬼だった。その瞬間、伊之助は鬼の頸を取りに行く。

「どうして一人も操れないのよ！殺せないのよ！このままだとまた累に！ いや！」

「

鬼は全力で糸を貼って蜘蛛で直接つけようとしてくる。しかし、伊之助に全て簡単に斬られてしまう。もう打つ手はない。この鬼は必死に考える、殺されることを回避できる方法を。でも、最後にたどり着く決断は違う。この鬼は……自ら頸を差し出し、楽になることを選ぶ。

「?!」

それに気づいた炭治郎は伊之助の前に出て伍の型で鬼の頸を斬った。千天の慈雨。ほとんど苦痛のない慈悲の剣撃。透き通るような優しい目。炭治郎はその目を鬼に向ける。

凄いやな、炭治郎は。頸を差し出した瞬間に伍の型を使った。炭治郎はあの一瞬で、切れ味の悪い伊之助の刀で頸を斬らせまいと前にでた。

「十二鬼月がいるわ。気をつけて……!!」

「?!」

「おい権八郎！ 良くも前に出やがったな！」

「どう言うことだ?! 十二鬼月?! 植物の話じやいなかった筈だ！」

誤算

十二鬼月がいる。どう言うことだ、植物たちからはいないと確かに聞いた！ だがこの鬼は原作通りに「十二鬼月がいる」と言った。どうなつてやがる！ いや、落ち着け。十二鬼月がいても炭治郎と義勇さんがなんとなしてくる。今はあの鬼殺隊達を下山させることだ。十二鬼月がいるのなら、危険だ。

それに、鬼殺隊は他にもいる。累の姉の繭で閉じ込められた人達を助けるんだ。

「炭治郎、鬼はいないが鬼に閉じ込められた人がいる。十二鬼月がいる以上まともに呼吸を使えない剣士は無駄死にするだけだ。下山させる。助けたらすぐに戻る」

「わかった！ こっちは俺達に任せてくれ！」

「気を付けるよ炭治郎、とんでもない馬鹿力の鬼と糸の頑丈な鬼がいる」

「わかった。ありがとう」

炭治郎達と別れ、まずは村田さん達の所に行く。十二鬼月がいることを伝え、下山を進めると皆素直に従ってくれた。これで九人は助かる。次に繭の処理だ。場所は聞いたからわかる。急がなくては。

途中で雷が落ちたような音がする。善逸が兄を倒したんだ。これで後三体。後は全

員放っておいても柱の二人が助けてくれる。

「あれが繭か！」

全ての繭を斬り裂く。全部で14個。

「全員生きているか！」

「……………」

「なんとか」

「服が……」

「キャッ!!」

三人間に合わなかった! いや、四人だ。まだ生きていてもこれは間に合わない。くそ! もっと早く来ていれば! 十二鬼月がいると最初っからわかっていたら十人の鬼殺隊は登山させなかった。一度下山させるために戻る手間も省けた。頸無しも俺一人で腕を切り落とせたからたいして時間もかからなかった筈だ! そうだよ! 原作通りなんだからたとえ植物達がいなくて言ってもいると思えば良かったんだ! 誤算だ。良く思い出して見れば累の眼は隠れてたから植物がいなくともおかしくない。

「なんだよこの鬼、糸を使うし普通の鬼より強いし!」

「大丈夫だ! 十二鬼月がいるんだ」

「十二鬼月がいるなら大丈夫じゃないだろう！」

「幸いにも距離がある。すぐに下山すれば助かる。それに十二鬼月がいる、それをわかつてる剣士が一人でもいると言うことは柱も来てくれると言う………。」

十二鬼月がいるから柱が来てくれる？ いやちよつと待て？ 違う筈だ。柱が来た理由は剣士が殆ど殺られたからだ。兄、姉、母が殺つたのを合わせて最低でも二十五人以上。三十人以上殺られたかもしれない。でもその中の二十人て結構多くないか？ 俺が助けた人達。

「?!」

「お、おいどうしたんだ？ いきなりそんな怖い顔して」

とんでもない誤算だ!! ここで大人数を助けたら柱が来ない! いや、毒を操る兄がいるからのぶさんは来るかも知れない。けれど、そうなったら伊之助と炭治郎はどうなる? 義勇さんがいなかったらどっちも殺られる! 俺が加勢して何とか倒しても義勇さんがいなかったらどうやって禰豆子を守る? どうやってしのぶさんを足止めする!

「お前達は今すぐ下山しろ! 俺はもう助けることはできない!」

禰豆子の事は後回しだ! 複数の事を同時に考えるな! 一つずつ確実にやるんだ

! まず伊之助の加勢! 急げ! 休まず呼吸をし続けるんだ! 体を限界まで酷

使しろ！ 考えろ！ あの鬼は脱皮をする！ その瞬間を狙えば光輪刀の誤法で斬れる！ たとえ頸が固くても日の光なら関係ない！ できるなら脱皮前に斬る！ 見つけた！

「伊之助！ そいつの足止めをしてくれ！」

「うるせえ！ 俺に命令するな！」

「親分！ そいつの腕を斬ってくれ！」

「自分の頼みとあっちゃ斬れねえな！」

伊之助が腕を斬ろうとする。しかし、刃が途中までしかいかない。

「その程度も斬れねえのか弱い猪だな！」

「ああ?! 俺が斬れねえわけねえだろ！」

伊之助は刀を叩いて無理矢理切り落とす。俺は光輪刀の誤法でもう片方の腕を切り落とす。

「なんだそれ?! 刀が光った！ 俺もやりてえ！」

「できるか！」

木の上に登った！ 脱皮を始める！ 僅かな時間だから急がないと！ 呼吸で足に力を集中させろ！

俺は鬼の頸の高さまで跳ぶ。そして頸を斬ろうとする。その瞬間、鬼は斬れた腕を振

るう。

「がはっ?!」

しまった! 急ぎ過ぎた! 始める前に斬ろうとしてしまった! 腕がまだ再生し
てなかったから対して力は無かったと思う。でもとんでもなく痛い! 呼吸のおかげ
で痛みは少ないがそれでも痛い! 確実に骨を折った! でも一番ヤバイのは絶好の
チャンス逃してしまったことだ! 脱皮された!

何とか受け身をとつてすぐに体制を立て直すも脱皮した大きさと圧にすぐに動けな
かった。

「……………」

ダメだ! 動け! 何で恐怖を感じているんだ! このままだと伊之助の頸椎が握
り潰されて死んでしまう! いや、まだ義勇さんが来ないと決まった訳じゃない。そう
だ、義勇さんが来ることにかけよう。

「獣の呼吸 参の牙 喰い裂き!」

伊之助の刀が折れる。この後伊之助は捕まって、刀を刺しても意味なくて……でも安
心だ。柱が来てくれるから

『守りたい』

何故か瀬笈葉の言葉を思い出した。走馬灯でもないのに、死にかけてもないのに、

葉一たんの事が頭を駆け巡る。どんなに打ちのめされても、どんなに希望のない未来だとしても、立ち上がって前に進んだ。でもそれは仲間の支えがあったからだ。でも、その支えてくれる仲間も、決意も、勇気も、自分から動かなければ得られなかったものだ！

「神頼みなんてしてんじやねえぞ糞然葉一！ 救いたい人達がいるから前に進むんだろ
うが!!」

光輪刀の誤法で斬り込みにかかる。恐怖心は消えない。でも、葉一たん支えと決意と希望の強みの方が上回った！ 体の震えはない！ やれ！ やるんだ！

鬼の腕を斬る。もう片方の腕で攻撃してくるも日の光の前には触れただけでもアウトだ。そのまま両腕を落とす。

「さらに硬くなったのに豆腐のように斬りやがる！」

「伊之助！ 頼む！ なんとか足止めをしてくれ！ 俺の刀なら！ 光った刀ならどんなに頸が堅くても斬れる！ だから頼む！ こいつの力だと俺一人じゃどうにもできない！」

「やってやらあ！」

「オレの家族に、近づくな、アアア!!」

伊之助を蹴ろうとするもかわす。

「獣の呼吸 壱の牙 穿ち抜き!!」

鬼の頸に刺す。しかし、頸の硬さに刃はそれ以上動かない。けれど、同じ日輪刀なら伝わる筈だ! 両腕を斬つてもなお頸の間合いには入れなかった! だがこれで届く!

「伊之助! 横に触れえ!!」

俺は伊之助の刀の一本に光輪刀を当てる。その瞬間、日の光が伝わり、頸の半分を斬つた。もう片方の刀にも当てようとするも鬼もそのままやらしてはくれない。再生した腕で俺を殴ろうとする。先に腕を対処しようとした瞬間。

「?!」

俺の刀が一瞬伊之助の振り切った手で持っている刃が滅茶苦茶に欠けている日輪刀に引つ掛かった。

「ゴフツ!!」

偶然だった。俺の刀が引つ掛かったから伊之助はどうかそうと無理矢理俺を退かした。それにより、俺には当たらなかつた。しかし、伊之助の腕に当たり、その腕ごと体を殴る。善逸じゃなくてもわかる。嫌な音だ。だが、俺は冷静だった。俺は刀を投げる。その刀は鬼の腕を貫通し、伊之助の刀に当たる。日の光が伝わったこと、ぶつ飛ばされようとも意地でも刀を離さなかつたことにより、鬼の頸は落ちた。鬼は塵になっていく。

「……勝った」

いや、まだだ。すぐに炭治郎の所にいかないと。時間がかかりすぎた。急がないと！

「伊之助！」

反応がない?! いや、気絶しているだけだ。だが腕が……原作より酷い怪我だ。しのぶさんに治療してもらわないと。すまない。すぐに応急手当をしないといけないが、一刻でも早く炭治郎に加勢しないと、すまない。

呼吸を止めずに走り出す。

俺は気付かなかった。この状況で、一つだけ不幸中の幸いがあることに。炭治郎はお父さん鬼と戦うも同じく飛ばされる。しかし、操られた鬼殺隊、頸無しの鬼と対峙しなかったことにより原作とは少しだけだがお父さん鬼と会う場所がずれた。そのことにより飛ばされた炭治郎は直後に累に会うことはなく、その僅かな時間のズレが累との戦闘に俺が間に合うことになる。良い誤算だった。

上手くいかない世界

「取り消さない！ 俺の言ったことは間違つてない！ おかしいのはお前だ！」
間に合つた！ まだ始まつたばかりだ。

十二鬼月の累、炭治郎と二人ならきつとやれる！

「水の呼吸 壺の型 水面斬り！」

「炭治郎！ そいつの糸は硬い！ 斬るな！」

間に合わなかつた。炭治郎は勢いよく刀を振るも糸を斬れず刀は折れる。

「炭治郎！」

「然葉よせ！ この糸は」

糸の迫る炭治郎の前にでる。そして光輪刀で糸を斬る。

累も炭治郎も驚いていた。

「なにそれ」

累は表情を変えずに聞く。さっきの鬼も、毒の鬼もそうだったが、どうやら光輪刀の日の光じゃ鬼は本能的に恐れることはないらしい。

だがそれがわかつた所でなんだ。おいとけ、いる思考だけを巡らせろ。

「光輪刀の誤法、お前の糸なんて斬るのは容易いぞ」

「……へえ、刀が光るんだ」

「然葉の日輪刀から日の光の匂いがする！」

「日の光、僕の糸が斬られるのはわかった」

日の光がある。だから累は俺を警戒する筈だ。集中すれば糸の速度に追い付ける。追い付けさえすれば糸は斬れる！

「?!」

糸の数も、速度も、炭治郎より上?! 俺には手加減されないんだ。

「葉の呼吸 二枚目 虫食い黄葉！」

「へえ、刀に頼るかと思ったら、動きもいいね」

「くっ！」

俺に攻撃が向いているおかげで炭治郎への攻撃は避けられるレベルだ。だが、俺の方が結構きつい！ 糸を一本でも斬り損ねたらそこから一気に崩れる。

「然葉！ 後ろだ！」

「三枚目 悲しき落葉！」

危なかった！ 炭治郎が言ってくれなかったら確実にやられてた！ だがこのままだと頸を取りにいけない！ 近づいたら炭治郎にやっている糸も全て俺に来る。そう

なれば対処できない！ いや、ある！

折れた刃を拾う。

「全集中・葉の呼吸 双葉 緑暴風！」

「そんなことしたら然葉の手が！」

炭治郎の言うとおりだ、刃しかないからその部分を持つしかない。血が出る！ だがより多くの糸を斬れる。二本分の日の光を使うが。

「うおおおおおおお！」

やれ！ やれ！ 糸を斬れ！ さらに近づけ！ 全てぶつたぎれ！

「?!」

「終わりだあああ！ 風揺られの扇！」

目の前にこれた！ 糸で防ぐことは不可能！ 頸を取った！

「え？」

……しまった？ 一步下がられた。まずい！ 両腕とも振りきった！ 新しい糸が

！ いや、捻りを入れる！

「六枚目 魅惑の花吹雪！ あ！」

足がもつれた?! 切られる？ 死ぬ……なんで、こう上手く行かないんだ。

「然葉！」

炭治郎に引つ張られた。後ろに跳んでくれた。おかげで距離もとれた。でも、二人ともすぐに刀を触れない。糸が迫る。俺が上手くやらなかったから、二人とも死ぬ？

今二人でじゃなくて、いけると思つて一人で言ったからだ。炭治郎の呼吸が深く整うのを待てばよかつたんだ。炭治郎の生流転は糸を斬れる。もつと確実にいけた筈なのに、焦つたから……もう、蓄えた日の光が殆ど残つてない。

「禰豆子!!」

「?!」

俺達は切られてなかつた。死んだと思つた。禰豆子が守つてくれた。でも、血だらけになつた。俺のせい……

「禰豆子……禰豆子……俺達をかばつて……ごめん……」

「……すまない……俺のせいで、妹が……」

左手首が千切れかけている。いや、右手首も、右足首……原作より糸の数が多かったから、さらに深い傷……

「兄弟か？」

「だつたらなんだ!」

「妹は鬼になつてるな……それでも一緒にいる……妹は兄を庇つた……身を挺して」

考え込む累……わかつてる。次のセリフも

「本物の”絆”だ!! 欲しい……!!」

「ちよつちよつと待つて! 待つてよ! お願ひ私が姉さんよ! 姉さんを見捨てないで!」

わかる。こここのやり取りも、姉が頸を切られて他の鬼殺隊を殺しに行く。全部知つて。炭治郎に妹の禰豆子を頂戴と言つて、炭治郎は拒否する。わかつてる。でも、俺にはどうすることもできない。恐怖に打ち勝つても、どんなに考えても、勝てない。さつき証明された。俺にはどうすることもできない。

あ。炭治郎も追い詰めるも頸を切る前に自ら頸を斬られて倒せず終わる。父さ鬼との戦いで義勇さんが来ないことはわかつてる。炭治郎も、俺も、殺される。しのぶさんが来てくれるかも知れないが間に合わない。もしかしたら伊之助も死ぬかな……終わつた。

原作に介入してより悪い結果にして、無責任にも死にました。無惨も倒せずに未来が悪化しました。鬼滅の刃バッドエンドの出来上がり。

「ふざけるのも大概にしろ!!」

「?!」

ふざける? いや、違う。俺はふざけてない。頑張った。頑張ったさ。でもこれだ。俺は人を助ける強い器も度胸もない。存在しない人物を思い浮かべて、それを心の支えにして、ばかみたいだ。俺自身はなんもない。ヒーローになりたかったただの哀れな人だ。

『然葉さんは哀れな人じゃありません』

葉、か。いや違う。俺が作り出した俺にとつて都合の良い葉に似た人格。励ますのは当たり前だ。けれどももういらぬ

『然葉さん!』

いらぬって言うているだろう。心のそこからもう諦めているんだから。いらぬ。

『なら……諦めても良いので聞いてください。確かに然葉さんは、恐怖に打ち勝つても、希望を持つても、同じ状況に、それ以上に悪い結果になりました。でもそれは然葉さんが優しかったからです』

俺が優しい? バカを言うな。俺は優しくない。優しいのは「瀬笈葉」だ。俺じゃない。

『然葉さんが優しくなかったら、誰も助けませんよ』

それは瀬笈葉だったら、そうやるだろうと。俺は瀬笈葉に限りなく近づいてる。髪も

体質も。俺自身が瀬笈葉ならそうやると。でも俺自身は心のそこでは違う。

『もしも誰かの真似でしたら、もつと良い結果を見いだせたかも知れないです』

どういふことだよ。おい！ どういふことた！

『誰かを助けられなかったとき、然葉さんは心から悔しがっていました。知っていた漫画よりも、目の前の植物達を信じてくれました。それは然葉さん自身が心から優しかったからです。もしも優しくなかったら、もつと冷静に考えて、もつと良い判断ができたと思います』

俺が優しくてもなんだよ。悪い結果には変わり無い。もう放っておいてくれ。

『私も冷徹でしたら、道中もつと良い判断ができたかもしれない。でも私は優しい性格にしてもらったから霊夢さんや魔理沙さん、皆に支えられました。皆がいたから道中心が折れそうになつても前に進めました。目の前の事も全て、大変でも解決できました』

.....

『ヒーローは最後まで諦めません！』

?!

『前言撤回します！ 諦めた然葉さんは哀れな人です！ ヒーローになれなかった哀れな人！ 女の私でも最後までやりきりました！ 男ならもつと最後までやりきつてく

ださい！』

瀬笈葉はそんな事言わない。瀬笈葉かそんな事を言うイメージは持っていない。

『私は然葉さんの作り出した人格ではないです！』

え?!

『よくわかりませんが、漫画の世界に転生するんですよ！ ゲームの世界から転生して

もおかしくありません！』

ええええええええええ?! てことは、瀬笈葉の魂が俺の体にあるってこと?!

『私は主人公です！ 炭治郎さんも主人公です！ ヒーローも主人公です！ ここに三

人も主人公がいるんですよ！ 諦めなければ絶対に上手く行きます！』

はは、葉が俺の記憶にある漫画に影響されていやがる……そうだよな。世界に一人の

転生者なんて、主人公要素バリバリじゃねえか。原作を知っている俺は皆を助けられる

可能性があるヒーローだ！

ありがとう！ 葉！ 俺はもう折れない！

『はい！』

????????????????

「葉の呼吸 八枚目 葉葉輪廻！」

ヒノカミ神楽と深緑

「葉の呼吸 八枚目 葉葉輪廻！」

立ち上がり、次々と糸を斬り累に捕まっている禰豆子を助けようとする。

「動かなくなっただと思っただけならいきなり動き始めた」

葉葉輪廻は散った葉っぱが次の葉っぱの為に肥料として命を繋ぐ。一撃目が終わっても次の二撃目に威力が受け継がれる。二撃目が終わっても三撃目に受け継がれ、威力が上がり続ける。

「へえ、光が無くても斬れるんだ。でも、糸の強度はこれが限界だと」

「糸がどんなに硬くても関係ない」

光輪刀の誤法、まだ累まで距離がある。けれど元から頸をとるつもりはない。

「?!」

累の腕が斬れる。累から禰豆子を引き剥がし、炭治郎の所まで引く。

驚いている二人。俺は刀を峰打ちで落ちていた折れた刃に日の光を伝えてかっとならした。

「ありがとう然葉。禰豆子を助けてくれて」

「いや炭治郎、俺のせいだ。禰豆子が守ってくれなかったら死んでいた。それに、上手くいかなかったからって戦うことを一度放棄した」

「でも、こうやって戦ってくれてるだろ？」

炭治郎の優しさが涙腺に響く。でも、泣くわけにはいかない。

流石は十二鬼月。他の鬼より治るのが早い。怒りの表情が露になる。

「僕の妹を奪ったのか？」

「いい加減にしろ！ 元よりお前の妹じゃない！ 恐怖なんかで支配して、家族とは呼ばない！！」

「うるさいよ、元兄が、妹もだ。教えないとだめだね。家族は引つ掻いちゃいけない。罰を与える。だから返して」

炭治郎のいかりが膨れ上がるのがわかる。そして、俺の怒りもだ。

「家族を引つ掻くとか言っておいてきつき姉さんの頸を斬つただろ！」

「あれは罰だよ。役に立たない姉さんにも必要だ」

「罰だとかてめえは何様のつもりだ！ 恐怖で支配するしか家族を得られないお前は家族を愛することもできないただの哀れな我儘小僧だ！」

今の言葉で累の何かが切れた。累の表情が元に戻る。だが、その瞳の奥からは俺達に對する憎悪が伝わってきた。

だが、何か切れているのは俺も炭治郎もだ。

「君たち二人、すぐに死んでいいよ」

今までにない程の糸が俺達に襲いかかる。俺も炭治郎も、呼吸を整えて精度の高い型をくりだす。

「全集中・水の呼吸 拾の型 生生流転!!」

「全集中・葉の呼吸 八枚目 葉葉輪廻!!」

二人で糸を斬る。前に進む、距離を詰める。行ける! 二人なら! このまま頸を斬れる! だが、俺はもつと強くなければ駄目だ! この後にくる累の血鬼術の糸を斬るには、葉じゃ斬れない! もつと深く! もつとだ! もつと呼吸をさらに、深いところまで!

「君も糸を斬れるんだ。さっきも言ったけど糸の強度はこれが限界だと思ってるの?」

累の手が紅く染まる。今だ、この糸がこない僅かな時間で呼吸を深く! 一枚目 深緑の温もりで限界まで深く集中しろ! 炭治郎だつてヒノカミ神楽で斬るんだ! ここで成長しなくちゃカツコ悪くて合わせる顔がない!

「血鬼術・刻糸牢」

紅い糸が迫る。葉の呼吸じゃ斬れないことはわかってる! だから、葉ーたん見たいに、最後まで諦めず、深く! 綺麗で、力強く、優しい呼吸を!

「深緑の呼吸 爽快血府！」

「ヒノカミ神楽 円舞！」

斬れた！ 光輪刀じゃなくても！ 瞬きするまもなく新しい糸が張られる。ここで引いたとしても、炭治郎は絶対に引かない！ それに、次すぐにこの呼吸はできない！
今ここで斬るんだ！

累の使っている糸は禰豆子を捕まえた時と同じ糸。俺が助けた事によりその糸は攻撃用になる。累は禰豆子の独特な気配により血鬼術を警戒していたが寝てしまい、一切の警戒を解いてしまった。それにより使ってしまった。だが俺は知っている。ここで、禰豆子が起きてくるのを、俺は知っている。禰豆子が糸を焼ききるのを。

そうでなくても！ 俺は全力で斬る！ ここで炭治郎が相討ちを選んだとしても、俺は炭治郎も俺も生き残る未来を進む！ ここでやらなきや俺は！ 未来への道を探すことも、進むこともできない！

禰豆子の血鬼術・爆血が糸を焼ききり、俺と炭治郎の刃が累の頸に届く。その瞬間、二人の日輪刀は片方は妹の血鬼術引き裂けない絆で、もう片方は日の光業の業がりで刀か加速した。

「俺と禰豆子の絆は誰にも！ 引き裂けない!!」

「見つけた未来への道を！ 俺は進む！」

累の頸は落ちる。二つの刃に挟まれた頸は自ら斬ることができなかった。累の体は

消滅し始める……勝った。十二鬼月を、俺達二人だけで。

「血鬼術・刻糸輪転！」

「?!」

累は頸を斬られた事により最後の最後に殺そうとする。ヒノカミ神楽の反動のある炭治郎は癒しの匂いのおかげで立ち上がりなんとか逃げようとするも糸は禰豆子も斬るつもりで放てれるとわかると両手を広げる。

「炭治郎、累。もういい、終わったんだ」

炭治郎は勢いよく振りすぎて俺の腕も切ってしまっている。あまり深くはないが血が出るには充分過ぎる。俺はその血を累の糸にかける。日の光は日輪刀に伝えるほど残ってはいないけれど血と共に流れるほどはある。弱いが糸を消滅させるにはほど足りる。

累は最後の悪あがきも通用しなかったが、禰豆子を守ろうとした炭治郎の姿をみた。最後の最後に全てを思い出した。親に謝る累。それを見た炭治郎は手を握る。

「この人のやったことは許されない。でもせめて、魂だけは両親の所に……」

呼吸をし、累に血を浴びせる。累に苦しみではなく、日の光の暖かさに包まれながら消滅させるために。

「せめて、鬼ではなく、日の暖かさを知る人間として」

「ありがとう。然葉」

本当は炭治郎が礼を言うことではない。だから俺はその礼を累の言葉として受け取った。

胡蝶しのぶへの時間稼ぎと提案

十二鬼月である累を倒した。二人でとは言え、癸の剣士が倒したんだ。だがまだ終わっていない。義勇さんは来てないがしのぶさんが来ている。植物が言っている。ここから一刻でも離れないと。

彌豆子の箱を持って炭治郎に呼び掛ける。

「炭治郎、柱が来ている。義勇さんじゃないから見つかれば彌豆子の頸をとられる可能性がある。逃げるぞ」

「わかったありがとう。彌豆子」

彌豆子が炭治郎の所へ来る。

「彌豆子、ちよつといいか」

俺は逃げる。箱を背負って。炭治郎はいくら癒しの匂いで動けるとはいえ箱を背負う体力はない。箱は累の衣服を結んで一時的だが背負えるようにした。

「ちよつと良いですか？」

上から不意に声をかけられる。植物の伝達速度よりもしのぶさんの方が早い。

「貴方は、蟲柱の胡蝶しのぶさん。俺は階級癸、翡翠島然葉です」

「私の事を知ってくれているんですね。では伺います。背中に背負っている箱は何ですか？」

「ただの箱です。それ以上でもそれ以下でもない」

「ではどうして箱から鬼の気配がするんですか？」

「さあ、この箱は空っぽですよ。紐が千切れてしまつて暫く置いていたんです。この山には鬼が複数いたので、興味を持つて遊んでたら気配がくつついたんじゃないかと思ひますね」

「では中身を見せてください」

「嫌です」

互いに笑顔で進む会話。

「この箱は（炭治郎の）宝物でして、誰にも手をつけられたくないですし他人の我儘で開けたくも無いです」

「我儘ではありません。鬼殺隊として、中身を見せて欲しいんですよ？」

「だから空っぽといっているじゃないですか。ほら、何か入っていたらただでさえ大きい箱、こんなには動けないですよ」

俺はその場でジャンプをする。正直いつてきつい。呼吸で無理矢理動かしているのだから。葉の呼吸だから動ける。葉の呼吸じゃなかったら動けなかった！

「俺に構わず鬼を狩りに行ったらどうですか？ まだ白い髪の鬼が残ってます」

「それなら先ほど殺しました。ですがそうですね、貴方の言うとおりに構わず鬼を殺しましょう」

しのぶさんが刀を抜いた瞬間、俺も刀を抜く。しかし、既に横から箱に刺されていた。
「?!」

速すぎる?! いくらなんでも、これが柱の実力。見えなかった。

しのぶさんが箱から抜くと血がついていた。すまん！ 炭治郎！

「鬼殺隊同士で刀を抜くのは御法度ですよ？ 知らなかったのですか？」

押さえ付けられる。しのぶさん。は柱の中で力がないって設定だけど嘘だろ！ 力

負けしてるんだけど！

「俺は箱を守ろうとした。ただの正当防衛だ。鬼殺隊としてではない。それに先に抜いたのは箱を壊そうとしたしのぶさんの方です」

「私は貴方に構ってませんよ？ 鬼に刺そうとしただけです……」

しのぶさんが箱を開けると、内側に血がついているだけで何も入っていません。

俺は禰豆子と炭治郎に頼んで禰豆子の血を内側につけた。嫌な顔をされたが柱が近づいている以上、時間稼ぎをする何かが必要だ。長時間禰豆子が入っていた箱だ。血があるだけでも充分に鬼の気配はする。

すまん。箱に穴が開いた。

「だから言ったじゃないですか。空っぽだって」

「どこにいるんですか？」

「何の話で」

「鬼はどこにいるのですか？」

殺気を感じる。俺に向けられている。刀を横に突き立てられている。今度は正直に喋ろう。

「……………鬼は俺と同じく鬼殺隊階級癸、竈門炭治郎がつれています。どこにいるからわかりません。ですが、あの鬼は炭治郎の妹です」

「まあ、妹が」

「ですがその鬼は二年間人を食べていません」

「鬼が二年間も食べないなんてことはあり得ません。ですが貴方は炭治郎さんの兄弟ではないのに庇っています。何か自身で確信している理由があるんですか？」

確信している理由か、原作を知っている。植物の情報網、言えることはある。だけど、「禰豆子は血を流しても目の前にいた俺と炭治郎を食うどころか鬼から守ろうとしてくれた。実際禰豆子がいなかったら死んでいた。それに、炭治郎は嘘をつくような奴じゃない!! 優しい人なんだ! 俺は炭治郎の言うことを信じる!」

しのぶさんの顔色が変わった瞬間、鏝鴉が飛び回る。

「デンレイ！ デンレイ！ タンジロウ！ ネズコ！ リヨウホウヲコウソクシ！ ホンブヘツレカエルベシ！」

俺の時間稼ぎは終わった。俺の名前も上がるかと思ったが俺はあくまでも箱を背負っているだけの別行動の人間だからか。

「ふう、特殊な鬼だから殺さずに何らかの対処をしようと思つてたから時間稼ぎして正解だった。だが、まだ終わっていない。しのぶさん、俺と取引しませんか？」

「取引ですか？」

「はい。要求は、柱として鬼の禰豆子を認める事と鬼を連れていた炭治郎の無罪を主張する事です」

「では貴方は何をくれるのですか？」

「のったのか？ それとも話を聞くだけなのか？」

「俺の血です。俺は日の光を吸収し、蓄えられる体質です。そんな俺の血は日の光が含まれていて鬼にとってはどうしようもできない猛毒です」

「嘘をついている、訳ではなさそうですね」

調べられればすぐにわかること。俺はしのぶさんを知っているしそれもしのぶさんはわかっている。だから嘘をついても意味がないことは相手にも伝わっている。問題

は承諾してくれるかどうか。

「わかりました。しかしまだ承諾してません。今回の件はおそらく柱合会議で話すことになるでしょう。そこで彌豆子さんが人を襲わないことを確信できたらの話です」

俺は安堵する。これで良い。少なくともしのぶさんは義勇さんの影響を受けていると思う。義勇さんが”守ろうとする”程の鬼。だから炭治郎達を自分の屋敷で治療させたと思う。だけど今回はそれが無い。柱合会議で知るところが念のため。だがこれで確実に炭治郎達は助かる。

ああ、呼吸が出来なくなってきた。ずっとしてたから流石に限界か。でもまあ、休めるしいつか。

呼吸をやめた瞬間、お父さん鬼との戦いの怪我、長い間呼吸を止めなかったこと、さらには深緑の呼吸をしたことによる反動や疲労が全て一気にきた為に気絶した。

機能回復訓練

やばいやばいやばい。炭治郎大丈夫かな。いくら原作では大丈夫だったとしてもバタフライエフェクト、俺の行動でダメにならないよね。一応義勇さんとしてのぶさんが味方についているから……

不安を誤魔化す為に怪我の確認をしよう。

骨折及びしのぶさんの屋敷にて治療してもらった俺はベッドでゴロゴロ過ごしていた。

擦過傷多数、足、腕に切創、全身筋肉痛重ね肉離れ、左肘、肋骨、を強打骨折、両足を疲労骨折していた。

炭治郎よりひでえ。まさか左肘も骨折してたとは、通りで痛かったわけだ。長い間の呼吸、及び長距離の全力疾走のせいで疲労骨折してたのか。でも仕方ない。あの短時間で山中を走りきるには反動なんて気にしてられなかった。

善逸。原作と同様。

伊之助。右腕三ヶ所、左足左腕骨折、右肩ヒビ。喉には影響なし。

一応お父さん鬼を倒せたから伊之助は元氣あるんじゃないかと思っただけだけど、原

作同様に元気がない。一人では勝てずに死んでいた事が堪えたようだ。表情がわからん。

「うるさいぞ善逸！」

「いやあああああ!!」

「薬ぐらい飲め！」

「飲めつて言うけどさ！ すっごい苦いんだよ?! 一日五回も飲まないといけないの！
ただゴロゴロしていれば治るお前とは違うんだよ！」

善逸とは同じ部屋になったとき、知り合いになった。竈門兄妹の話で一度は盛り上がったもののギャーギャー騒ぐ。

「森の無数の植物たちより善逸一人の方がうるさいぞ！」

「そりやそうでしょうね！ 植物はしゃべらないからね！」

「植物達だつて喋れるぞ！ お前めつちや耳良いんだからよく聞いてみるよ！」

「俺耳良いこといつたつげ?!」

「植物達で噂になつてるわ！ 雷に打たれて髪の毛が黄色になつたとか！ 修行から逃げ出したとか！ 桃投げつけられたとか！ 年下に守ってもらおうとしてたとか！

とんでもない行き恥さらしとか！」

「言い方あ！ 植物つて喋れるの?! ねえ！ 何で悪いところばつかなの?! 良いところ

ろとかないの?!」

「知らん!」

本当は感謝されていたけど。お兄さん鬼倒してくれて。耳がめっちゃ良いからいつか自分達の声も聞こえるようになったくれるかもと期待していたし。

「嘘だよね?! 音が聞こえるもん!」

「静かになさってください!」

「静かにしますので栄養のある土と水をたっぷりください!」

「用意しました!」

受け皿まであつて、随分と用意周到なこと。早速おいて右腕を袖を捲つて突っ込む。そうすれば早く治るから。最初は土の上で寝ようとしたが着替えとう片付けとう色々不便なため腕だけになった。

用意してもらおう理由を言っても最初は信じてもらえずリスカして早く治るのを実演したらすつげえ怒られたが認めてもらえた。

暫くすると炭治郎が隠の人に背おられてやって来た。

「炭治郎! 無事だったか! 禰豆子は大丈夫なのか?!」

そう、一番不安だったのが原作より酷い怪我の禰豆子なのだ。風柱である不死川の実演により禰豆子が人を襲うことを証明しようとした。禰豆子は我慢できたのか?!

「ありがとう然葉！ 禰豆子の為に！」

「どういうこと?!」

「しのぶさんが自分の血を取り出して禰豆子が人を！」

「わーわーわー！ 炭治郎！ 後で聞く！ 後で聞くから今は隠の人達に仕事をさせてあげて！ 背負った状態で会話されても隠の人達困るから！」

まだ禰豆子の事が認知されてないから！ 色々と騒いで落ち着いた後、柱合会議で何があつたのか聞かされた。

柱は最初炭治郎と禰豆子を処刑しようとしていたがしのぶさんが自分の血を取り出して禰豆子が人を襲わないことを証明した後、十二鬼月を倒した功績から無罪と今後も今まで通り、鬼殺隊として活動すること、禰豆子を鬼殺隊にいることを蟲柱として認められたこと。

義勇さん、炭治郎、鱗滝さんが腹を切る手紙を読み上げた後、しのぶさんが俺の腹を斬ることを追加した。

「それも然葉がしのぶさんと取引したからだって言うんだ！ 禰豆子の為にそこまで、すまない！ ありがとう！」

「お、おう」

俺まで腹を斬ることにされてるんだけど。ふざけるな。禰豆子、絶対に人を襲うな

よ。絶対だぞ！

それにしても不死川ではなくしのぶさんか。禰豆子が人を襲わないと証明できたらつと言っていたから。でもこれで血を抜かれるのか。

それからの日々はうるさい善逸、静かな伊之助、励ます炭治郎、独り言（窓際にて植物との会話）の俺。好きあらば呼吸をしていたのと土から栄養を摂取していたために誰よりも早く治り、いち早く機能回復訓練を行うことになった。

「いいでででででで!!」

三姉妹の体引っぱりするやつあれ痛い。訓練の為に呼吸は無し。だから痛みが緩和しないからマジに痛い。

おいかけっこはアオイに勝てたのだがカナヲには勝てない。全集中・常中を会得しないと無理やな。問題は反射訓練、湯呑みをかけるやつ。まさかの致命的な欠点が浮き彫りになった。

「ずぶ濡れだ……」

「然葉さんは反応が遅いんですよ。咄嗟の判断ができていません」

アオイにすら全く勝てない。

そう、原作を知っているからと、どうすればいいかあーだこーだ考えながら行動しているために動体視力が低いのだ。反射神経も鈍い。前世の記憶があることによる生ま

れつき考えすぎる癖が原因だ。

「アオイ、すまないが暫く機能回復訓練をサボらさせてもらう。単純に反射神経が鈍いからそのの向上と全集中・常中を会得したい」

なるべく思考を停止させて自然の流れにのり、逆らう。神経をより尖らせる為に。生きるために山で過ごしてきた五年間とは違う。洗練する為に過ごす。常に呼吸をする。集中力を上げる。一枚目 深緑の温もりに頼らずに深緑の呼吸を出来るようにする。寝るときは戻ってきて三姉妹に頼んで呼吸が出来てなかったら叩き起こしてもらう。

炭治郎と伊之助が訓練に参加し、善逸も訓練に参加する頃。俺はついに全集中・常中を会得した。元々会得しやすい呼吸であると自覚はしていたがここまで早く会得できるとは思わなかった。

「アオイ、訓練を再開する」

鬼ごっこはカナヲに勝てた！ 湯呑みもアオイに勝てた！ 後はカナヲだけ！ 頑張れ！ 頑張るんだ！

「あっ?!」

薬湯をかけられてしまった。だが善戦できた。勝てる日も近い。反射神経をもっとよくなるように訓練を続けて、呼吸も深緑の呼吸をもっとすぐに、もっと出来るようにしなきゃ……そして、あの技を完璧にしないと。猗窩座に、おそらく俺は、たった一撃

の為に無限列車までの時間全てを捧げる。

屋根の上の三人

炭治郎が全集中・常中を会得しようとしているなか、俺はついにカナヲに勝った。この時、俺は何故か変なことを考えていた。

炭治郎、頭の上に奥

伊之助、ぶっかける

善逸、カッコつける

俺もなんかしなきゃ！ と、だが何を、何をすれば良い。インパクトがでかすぎてもダメ、かといって何かをしなくてもダメ。

いつの間にか俺はお茶を飲んでいた。

「……薬湯つてうめえ」

「何で飲んでるんですか！」

アオイに怒られたのは置いといて

この時代の薬は薬草のせいとか、特異体質の俺は物凄く美味しく感じる。何故こう思ったのは、もしかしたら最近ふざけていないからか。たまには気分転換も必要かな、夜屋根の上で夜景に当たるか。久し振りに口笛をしよう。

「然葉、それってさあ、何の曲？」

サボっている善逸が聞いていた。

「d o o o o o」

「どーる？」

「人形って意味さ」

「題名の割には力強いく優しい音なんだな」

「ある人を表している曲でさ、俺も何でd o o o o oなんだろうって思ったら、意味を知って号泣した」

「何で泣くのさあ?!」

「だって、自分の意思で動いていたら実はそうなるように人格や性格を作られていましたってオチなんだぞ? 泣けずにいられるか」

「その人、可哀想なんだな」

「最期が笑顔なのが唯一の救いさ」

俺は次に夢幻を吹く。

「前から気になってたんだけど、然葉から音が二つ聞こえるんだよね」

「二つ?」

「ああ、常に聞こえている音とは別にその奥から別の音が聞こえて、優しく強く、癒され

るような音」

葉ーたんの音か。魂が体にあるから聞こえるのか。体もあれば一緒にいられるのにな。精神的ではなく。

「どうしてだろうな。俺にはわからないな」

「いやわかっている音がするぞ」

「寝る」

「教えてくれよ」

「善逸」

「？」

「お休みなさい（理想の葉ーたんの声）（葉ーたんの最高の笑顔）」

「うん！ お休み！ ……………じゃねえ!!! ああああ！（汚い高温）」

俺自身葉ーたんに似ていることはわかっていたために試しに真似てみたら予想以上に葉ーたんだった。そして善逸が騙された。

夜、屋根に登って星空を見る。綺麗だ。よく考えたら転生してから一度もゆっくり見てなかった。前世とは大違いの空だ。

炭治郎が登ってきた。

「炭治郎、お前も夜景を見にきたのか？」

「然葉、俺はより集中して呼吸するためにきたんだ」

「そうか、すまないな。常中を教えられなくて」

「仕方ないさ、然葉と俺の呼吸は違いすぎるから。俺も早くできるようにならないと」

しのぶさんに確認したところ、俺の回復の呼吸は独自のもので柱たちが使っているものとは違う。その呼吸が色濃くある葉の呼吸の常中は他の呼吸の常中とは感覚が違うらしい。その為俺は癒しの呼吸と呼ぶようにした。

「夜景が好きなのか？」

「時が流れているのを忘れるぐらいに……」

「然葉の近くにいとると日の暖かい匂いと癒しの匂いがして眠くなるな」

「寝てる間呼吸できてなかったら叩き起こすか」

「そうか！」

その手があったか！ 見たいな顔。この会話の間も俺達二人は呼吸している。

「もしもし」

「はー」

「頑張ってますね」

後ろからしのぶさんがやって来た。気づかなかつた。月明かりしかないが、心に余裕があつて見ると、しのぶさんは凄く綺麗だった。

「お友達二人はどこかへ行つてしまい、然葉さんは訓練を終了しましたし、一人で寂しく無いのですか？」

「いえ！ できるよになつたらやり方教えたあげられるので！」

「反射訓練だけは終わつても続けるつもりです。俺もまだまだ未熟ですので」

「……君達は心が綺麗ですね」

「心が綺麗なのは……炭治郎だけですよ」

葉一たんも思い浮かんだけど、この場にいるのは炭治郎だけ。

「私はずつと気になっていたことがあります。然葉さんは禰豆子さんを守るために頑張つてくれました。ですが聞けば炭治郎さんとは三度しか会つてないと聞きます。それも一日や2日程度、家族の炭治郎さんとはともかく、貴方も命をかける理由はないのでは？」

俺の命かけたのはあんたでしょうが。

しのぶさんの疑問はもつともだ。炭治郎も今言われて気になった。原作を知っているから。と言う理由はだめだろうな。でも、たとえ原作を知らなくても俺は頑張れたと

思う。

「……ナイフとか今ありますか？」

「ありませんけど？」

俺は指の先を噛みきつて血を流す。炭治郎は驚いた。俺も予想以上に血が出で驚いた。自身の血を飲む。

「やべ、割りとでた……旨い」

「血が美味しいのですか？」

「俺の血は甘いんだ」

「甘い?!」

二人の驚いた顔。この時点でのしのぶさんのその顔はレアですね。

あり得ないと言いたげな顔。

「家族に異様な人がいたら俺は嫌だな。家族にいたら嫌う。多分、家族の誰かが鬼になっても炭治郎のように守ろうと思わない。でも炭治郎は妹が変わってしまっても信じた。守った。俺とは違う。俺は色々と考えてしまう癖がある。だから、確信と不安が常にあるんだ。でも炭治郎はただ目の前の事を信じ、ただ純粹に頑張れる。俺も、炭治郎と一緒にいれば信じる事ができるような気がすると思っただ。真っ直ぐに、そうすれば、異様である俺自身、変われるんじゃないかと。臆病な自分を変えられるんじゃないか

と。だから信じる事にした。炭治郎が信じることを」

俺自身変わらないと、いざというときあのとき見たいに恐怖に負けてしまう。

「そうですか……所で本当に血が甘いのですか？」

俺の長文聞いて出てくる感想がそれですか。いやまあ、血が甘いのは衝撃的過ぎますけど。

「……飲んでみます？」

しのぶさんの手に一滴垂らす。口に当てる。

「甘いです。とても、高級の菓子を食べているような甘さですね」

「炭治郎も飲む？」

「俺はいいよ」

「まあこつそり善逸の薬にいれていますけどね。おかげで騒がなくなりましたし」

「善逸が大人しくなったのはそう言う事だったのか」

「あ……」

やべえ、とんでもないこと思い出した。やべえ、汗が止まらねえ。

「どうしたんだ？」

心配そうに見る炭治郎。

「炭治郎、浅草で会った日のこと覚えてるか？」

「浅草で……あ?!」

炭治郎が驚いた顔のままゆっくりとしのぶさんの方を見る。

「炭治郎、お前からよろしく」

「ええ?!」

俺はそのまま屋根から降りて逃走する

「どうしたのですか?」

「その、浅草で無惨に会いました」

「浅草で、と言うことは然葉さんも会っているのですね」

「はい……それどころか……」

「?」

「無惨に大量の血を入れられてまして……体内の日の光で消滅させたのですが、鬼にしか見えない血鬼術が見えたりと変化が合ったみたいですよ」

それを聞いた胡蝶しのぶ。暫く笑顔で固まったあと屋根を降りていった。炭治郎いわく、物凄い怒りの匂いがした。と

無限列車

「善逸、俺は地図音痴なんだ。列車までの道頼む」

「ここは植物はないからな。そういうのに頼つてると地図も見ないのか」

「いや、百回ぐらい地図に頼ったことがあるけどそのうち道を間違えたのが85回ぐらいいんだ」

「どんだけ間違えてるの?!」

列車にたどり着くと伊之助が列車に猪突猛進して車掌さんに怒られたり逃げたり忙しかった。

「ほい、切符買つといたぞ」

「然葉だけ追いかけてられてなかったのはどうしてなんだ?」

「人が多かったからな。背中刀隠してた」

「ねえ、どうして早めに言ってくれないのさ?」

「一度こうならないと伊之助が今後も隠さないと思ったから」

「確かに。丸見えだよ!」

列車にのれたけれど伊之助猪の皮被つててよく乗れたよね。刀よりも問題じゃね?

別の意味で。

「煉獄さんに会いたいけど何両面なんだろうか」

「主の腹の中だ！ うおおおお！ 戦いの始まりだ！」

「うるせえよ！」

「どうしよう、伊之助と離れたい」

「煉獄さんは俺と然葉しか知らないから離れ離れになると伊之助がわからなくなるぞ」

「言うて俺は今日が初めてだけだな」

色々知っていても”植物に教えてもらった”で全て片付くから良い。煉獄さんを知っているのもそれを理由にした。

「うまい！ うまい！ うまい！」

「この人が炎柱」

「うん……」

「ただの食いしん坊じゃなくて？」

「うん……」

いざ生で見るとどうしよう、何故だろう。好きなキャラクターなのに物凄く悪寒がする。本能が煉獄さんを避けているような……俺は葉っぱだからか。

「うむ！ そう言うことか！ だが知らん！ 「ヒノカミ神楽」という言葉も初耳だ！

君の父がやっていた神楽が戦いに応用できたのは実にめでたいがこの話はこれでお終いだな！！ 俺の継子になるといいめんどろをみてやろう！」

煉獄さんが呼吸の歴史を語る。炎・水・風・岩・雷が基本の呼吸。原作で見逃していたが緑色つて風の適正だったんだ。葉っぱの、自然の色じゃないの?!

「あの、煉獄さん。俺の刀緑色何ですけど。葉呼吸はっぱを使うのですが」

「うむ！ 葉の呼吸か！ それは風の派生か！」

「いえ、我流です。回復の呼吸によく似た我流の癒しの呼吸を元にしたので」

「我流か！ それは凄いことだ！」

「俺も我流だぜ！」

「二人も我流がいるのか！」

こっそりと刀を取り出して見せる。

「うむ！ その色は見たことがない！」

「え?! 緑ですよ?!」

「確かに緑だが風の緑のりも深い緑だ！ きつと色通り葉の呼吸が適正なのだろう！ よく見ると植物の模様がある！」

「え?!」

俺は刀身をよく見る。確かに植物の模様がある。特に葉っぱの模様がが多い。けれど、常に持っていたのに今まで気づかなかったのか?! いや、色が変わったときも良く見たけど模様はなかった。途中で模様が現れたのか? いや、一度色が変わったらずつと変わらない筈だ。何故だ?

とりあえず刀をしまおう。

「切符を拝見します」

やっべ、煉獄さんの話に夢中になつていたせいで忘れてた……ここからが本番だ。寝たらずぐに自殺。すぐに戻って禰豆子の爆血で縄を切る。いや縄を結ばれる前に全員気絶させて炭治郎達を起こしてすぐに下弦の壺をぶつとばす。おけ、おそらくこれで列車は脱線しない。上弦の参がどんな行動をするかわからないが少なくとも乗客を殺すことはしないだろう。全員が体力ほぼ満タンで戦える。

切符が切られる。その瞬間煉獄さんは立ち上がる。車両の中に鬼が?! 気づかなかった! なんかの血鬼術か?

「この煉獄の赫き炎刀が! お前を骨まで焼き尽くす! 炎の呼吸 壺ノ型 不知火!!」

これが柱の力! 威力も迫力も、早さも俺は圧倒的に敵わない。だが、この人の継子になれば俺もあんなつよさを……

「おいらを弟子にしてくださいええ！」

炭治郎！ 伊之助！ 善逸！ そうか、皆同じ考えなのか……

「お、おいらも弟子になりたい……です」

「どうした！ 然葉少年！」

「その、おいら、葉の呼吸なので、炎の呼吸を使えるようになれるか不安なんです」

「そうか！ 確かに植物に炎はきつい！ だができるようになれば葉は炎をさらに燃えあげるだろう！」

「でも、できるかどうかは……」

「頑張れ頑張れできるできる絶対できる頑張れもつとやれるって！ やれる気持ちの間題だ頑張れ頑張れそこだ！ そこで諦めるな絶対に頑張れ積極的に前に進め前に頑張る頑張る！ 他の鬼殺隊だって頑張ってるんだから！ もつと！ 熱くなれよおお！」

「煉獄の兄貴い！ おいらは絶対にやりとげまつせえ！」

????????????????????

「ここは、どこだ？ 何の空間だ？ 霊夢たちがいる……そうだ！ この空間は瀬笈が、たつた今、役目を終えたんだ……。」

「然葉さん！ ありがとうございます！」

「へ？」

「おいおい、そんな幽霊を見たようなおすんだぜ？」

「いや、どうして瀬笈が？」

「何を言ってるのよ、あんたが助けたんでしょ？」

「俺が？ そうだ、俺の”鍵を司る程度の能力”で瀬笈の体に鍵をかけて消滅しないようにしたんだった」

「そこに私の不死鳥の力で生きられふ体まで復活させたんだ」

「もしかして頭でもぶつけてしまったのでは？ 今見せてください」

「いや、大丈夫だろうどん」

「だからうどんと呼ばないでください！」

「そうだ。俺達は瀬笈を助けるために頑張つて、皆で知恵を絞つてやつと助けたんだ。もう”毒”を蓄えた瀬笈、役割のある瀬笈葉はいないんだ。ここにいるのは、幻想郷が、皆が大好きな瀬笈葉。」

「瀬笈、”みなさんと一緒に生きていられますように”願いが叶ったな」

「どうして知ってるんですか?! 無くしてしまった短冊の事を!」

「無くしたんじゃない。俺が盗ったんだよ……瀬笈、飾らなかつたから……だから俺が飾った」

「?!」

瀬笈が驚いた表情を隠せない。皆も驚いていた。

「人の物を盗るなんてまるでどこかの普通の魔法使いね」

「私は盗ってないぜ? 借りているだけだぜ?」

「だれも魔理沙のことなんて言っていないわよ」

「全員が私の事を見てたんだぜ」

「あら、私はお嬢様をみてたわよ」

「私は咲夜の事を見てたわ。自意識過剰はこのこのね」

「自意識過剰はレミリアだろう? カリスマ性皆無のお嬢様」

「なによ! 本気出せば私だって!」

「あはははははは!」

「笑ったわね然葉。後で覚えておきなさい」

かお真つ赤のレミリア。俺と魔理沙に対して殺意を感じるなあ、あれ?

「違う違う。大きな異変が終わった直後の会話とは思えないなど。だってポロポロだぜ」

「？俺ら」

「確かに、帰って風呂入りたいたいぜ」

「じゃあ俺一番風呂、先に入らないとお前らに入られちゃうからな」

そう言つて俺はさつきと向かう。誰かに入られると男である俺は入れないからな。だが俺が先に入れば今すぐに入りたい奴らも待てざる終えない！ または一緒に入るしかない！ 俺は変態扱いされない！

「あ！ 待つんだぜ！ 一番風呂は私と葉だぜ！」

「どうして葉も？」

「一緒に風呂はいる約束をしたからだぜ！ 帽子は外してもらうぜ！」

「ぼ、帽子もですか?! ……わかりました」

「くっそ俺も見たい！」

「なら入れば良いじゃない」

「乙女の風呂場に入るのは良くないぜ？」

「どこに乙女がいるんだ？」

「……私よ（です）……」

「俺も心は乙女だ！」

「……それはない……」

結局咲夜には勝てず先に入られてしまったけれど、聞こえてくる声が一番に嬉しそうだ。瀬笈も、俺も、皆も、やっと手にしたんだ。助けられたんだ。俺の能力はこの為にあったのかも知らないな。さてと

「仕方ないから井戸の水で洗ったし、皆が風呂に入っている間に飯を作って宴会の準備をするか！」

冷蔵庫に何が入ってるかなあ、異変のせいであまりなさそうだな。買ってくるか。

「霊夢、宴会の酒とか買ってこるから財布借りてくぞー！」

「ちよつと待ちなさいよ！ 何で私の財布なのよ！」

無視無視く、さてと、ここ最近和しか食ってないからたまには洋風の料理でも。ん？

「瀬笈？」

あれ？ どうして瀬笈がここにいるんだ？ 今風呂にいる筈だけど。帽子の中見られるのが嫌で飛び出してきたのか？ でもその割には濡れてないし。急いでいる様子だし。

「然葉さん！ これは夢です！ 早く眼を覚ましてください！ 血鬼術で眠らされているんです！ 鬼が近くにいます！」

鬼？ けつきじゅつ？ なんの話だ？

別の葉っぱ

「ああああああああ!!」

炭治郎さんが大声をあげながら眼を覚ました。首を押さえている。汗も酷い。悪夢を見ていたのでしょうか？ 違う。炭治郎さんは自分で頸を斬って起きた。

「禰豆子！ 大丈夫か……!」

焼ききれた縄、切符から鬼の匂いがする見たいですが私にはわからない。

「煉獄さん！ 善逸！ 伊之助！ 然葉は目覚めたのか!」

そう言うと炭治郎さんは座席の下にある日輪刀を取る。

「然葉さんはまだ目覚めていません」

「?! 目覚めていない……然葉の奥にある然葉とは違う植物のように優しい匂い、君はいつたい」

「瀬笈葉です。然葉さんの体を借りています。本当は起こしたかったんですけど、私は強い衝撃で起きてしまうみたいです」

夢の中にいる然葉さんに今の状況を伝えようとしたけれど、霊夢さん達に偽物として退治されてしまったから、然葉さんが自力で起きられるように信じるしかありません。

「どういうことか良くわからないけれど、葉からは嘘の匂いはしない。わかった、今は?!」

「邪魔しないでよ! あんたたちが来たせいで夢を見せてもらえないじゃない!」

女の子がアイスピックを?! えっと、漫画では……然葉さんの記憶が見れない。でも、良い夢を見させてもらう為に動いているはず!

「何をしてんのよあんたも起きたなら加勢しなさいよ! 結核だが何だか知らないけれど、ちゃんと働かないならあの人に言つて夢見させてもらえないようにするからね!」

結核……然葉さんのいた時代じゃないと直せない病氣……。皆の心につけこんで、下弦の壺さん、許せません。

「ごめんなさい。私はこれからやらないといけないことがあるんです」

「ごめん。俺は戦いに行かなきゃならないから」

私と炭治郎さんで子供達を気絶させる。

「幸せな夢の中にいたいよね。わかるよ。俺も夢の中にいたかった……」

「私もです。願いが叶ってほしかった」

私は男の子の前まで歩み寄る。

「これを飲んでください」

私は泣いている男の子に歩み寄って、水筒を取り出す。

「これには万能薬が入っています。鬼に傷つけられた時や毒にやられたときに使います。きつと結核にも効きます。それを飲んで、元気になつてください。できるのですから、ここににいる皆さんを元気付けてください。心が折れている時は、元気な誰かの言葉が必要なんです」

「……………甘い。美味しい……………ありがとうございます。ありがとうございます……………気を付けて」

男の子は泣いてしまいましたけれど、涙をこらえてそう言ってくれた。

「はい！」

私と炭治郎さんは列車の上に、禰豆子さんは皆さんを起こすために残りました。すると、下弦の壺さんかいた。

「あれえ起きたの。おはよう。まだ寝てて良かったのに」

この人が、皆さんの心を……………！

「せつかく良い夢を見せてやっていたでしょう。お前の家族を惨殺する夢を見せることもできたんだよ？」

「人の心の中に土足で踏みいるな！ 俺はお前を許さない」

「そうです！ 夢を見せるのならその人が現実で前を見て進めるような夢にしてください！」

「然、じゃなくて葉！　そう言うことじゃない！」

「え?!」

「違います?!　確かに！　心を利用して核を破壊しようとしてました！」

「今から貴方を退治します！　葉の呼吸　八枚目　葉葉輪廻！」

「水の呼吸　拾ノ型　生生流転！」

「血鬼術・強制昏倒催眠の囁き」

手にある口から眠りの言葉が聞こえる。けれど私は意識を手離さなかった。

通常、眠り鬼の術に落ちている時は意識と肉体を完全に切り離された状態で夢に閉じ込められる。それは血鬼術をくらった肉体が魂ごと夢の中に閉じ込められているからである。しかし、血鬼術をくらっても既に然葉の体は然葉の魂を夢に閉じ込めているため血鬼術を一切効かなかった。周りにさんざん止められたがため自傷するのに躊躇いの瀬笈葉には本人も気づかない下弦の壺の誤算だった。

そして、炭治郎もすぐに自殺して起きるといふ誤算をやったのけたが為に、下弦の壺の頸は落ちる。

「死なない?!」

「素敵だねその顔。そういう顔を見たかったんだよ。うふふ。それも喋っているこれも本体ではなくなつたんだ。だから死なない。君達がすやすやと眠っている間に。俺はこの汽車と融合した!」

「汽車とですか?!」

「この汽車全てが俺の血であり肉であり骨となつた。うふふつその顔! いいねいいねわかつてきたかな? つまりこの汽車の乗客二百人余りが俺の体をさらに強化するための餌、そして人質」

二百人?! 鬼は人を食べた人数で強くなる。そんな事させません! 誰も殺させません!

「ねえ、守りきれぬ? 君達二人で。この汽車の端から端までうじやうじやしている人間たち全てを、俺に”おあずけ”させられるかな?」

「二人じゃ無いです!」

「?」

下弦の壺さんは不思議そうな顔をします。

「彌豆子さんがいます! 皆さんを起こしてくれませう! だから二人じゃ無いです! 伊之助さん! 煉獄さん! 善逸さん! 炭治郎さん! 彌豆子さん! 皆さんと一緒に守ってみせます! いえ! 絶対に守ります! 下弦の壺さんに負けるか!!」

「……………君、癩に触るなあ。隣の君と同じぐらい……………守って見せてよ。二百人を。君の言う皆で」

そう言うのと下弦の壱さんは姿を消した。

「はい。守ります。もう既に皆さんは、起きてますから」

その瞬間、伊之助さんが汽車を突き破って上に来る。

「爆裂覚醒！ 猪突猛進！ 伊之助様のお通りじゃアアア！」

「伊之助さん！ 汽車全体が鬼になってます！ 眠っている人達を守ってください！」

「やはりな……………俺の読み通りだったわけか。獣の呼吸 伍の牙 狂い裂き！」

「炭治郎さん！ 前の車両をお願いします！ 私はその車両の人達を守ります！ 葉の

呼吸 二枚目 虫食い黄葉 双葉 緑暴風！」

「流れるように技を出している?! 刀が二つ必要な緑暴風を一つで……………葉。君はいつた

ら」

炭治郎さんはそう言いながらも前の車両の人達を守る。

悪夢

「葉の呼吸 三枚目 悲しき落葉！」

多すぎる。煉獄さんはこれを一人で五両も、凄いです。私と炭治郎さんで三両が限界

！

「?!」

列車が少し浮いた?! 鬼の攻撃、いえ。この鬼に列車が脱線する可能性がある衝撃を加えるのはおかしい。

「翡翠少年！」

「煉獄さん！」

この衝撃は煉獄さんのだ！ 凄い、移動するだけで。純粋な力だけなら霊夢さんにも負けない気がします。

「余裕はない！ 手短に話す！ この汽車は八両編成だ！ 俺は後方四両を守る！ 竈門少年と猪頭少年は鬼の頸を探してる！ 君は残りの四両を黄色い少年と竈門妹と共に守れ！」

「五両守ります！ 煉獄さんは三両守ってください！」

「先ほどと気配が違うが今は気にしない！ 君たちの実力はまだわからないが三人で五両はきついだらう！」

「上弦の参さんが来ます！ 煉獄さんはなるべく体力を使わないでください！」

「うむ！ どうしてそんなことがわかる?！」

「私は植物と話せます！」

「なるほど！ 先ほど言つて欲しかったがわかった！ 五両を君達に任せよう！」

煉獄さんはまた列車が浮くほどの勢いで移動した。み、耳が痛いです。

善逸さん禰豆子さんすみません。ですが、ここで私たちが頑張らないといけない！

煉獄さんが死なない道を進むために！

隣の車両から寝てる善逸さんが来た。

「善逸さん！」

「君は、然葉の奥から聞こえてきた」

「瀬笈葉です！ 善逸さん、上弦の参さんが近づいています！ 私たちが五両守つて少

しでも煉獄の体力を温存させてください！」

「上弦が、わかった。ここで俺達が頑張らないと」

「はい！」

下弦の壱さんは炭治郎さん達が倒してくれます。それまで私が頑張らないと。今の

私の実力じゃ戦力にならない。ですから、それまでに起きてください！ 然葉さん！
 たった一瞬でも戦力になれるように一つの技を極めてきたんですから！ 私ではでき
 ない。だから早く起きてください！

なんで、どうしてこうなった？ どうして？ 俺は、救えたんじゃないのか？ 救
 ったんじゃないのか？ なのに、どうして？ なんで瀬笈が目の前で倒れてる？ 沢山の血
 を流して、なんで俺達は罵倒されてる？ 瀬笈は幻想郷を救うために命を投げ出して、
 俺は投げ出した命を救ったんだ。悪いことなんて、してないはずなのに。何故？

「葉！ 起きるんだぜ！ 葉！」

魔理沙が必死に瀬笈に声をかける。でも瀬笈は動かない。

「何故異変の主犯を助けた！ 妖怪の味方をするなど博麗の巫女も落ちたものだ！」

誰かの声が聞こえる。

「魔法に手を出し幻想郷を崩壊させる妖怪の手助など、お前を産んだのが恥だ！ いや、
 間違いだった！ 私の最大の過ちだ！」

また誰かの声、きつと魔理沙の親父さんだろう。

他にも俺達を攻め、否定する声が飛び交う。瀬笈が異変の主犯？ 違う！ 瀬笈は！

「瀬笈は異変の主犯じゃない！ 異変の主犯は植物達の毒だ！ 瀬笈はそれを浄化するために命を捨てたんだ！ 幻想郷を救うためにだ！ 俺達はその命を救った！ お前達のように真実を知らない情弱ゴミ自分が正しいと思ってる糞やろうとは違う！」

なにを言っても、真実を言っても、誰もが攻めるのをやめない。何故かこの異変の影響を受けていないやつらまでいる。幻想郷中が俺達のやって来たことを否定する。

どうして？ 何故こうなった？ そうだ。瀬笈の偽物が現れたあとにこうなった。あいつが何かしたんだ……

「霊夢……俺達がやって来たことになんの意味があったんだろう。そうやって責められて、救えたと思つた瀬笈を目の前で殺されて、この分だと霊夢がせっかく作つた弾幕ごっこも、否定されていく。早苗も、瀬笈を信じ続けた。信仰も薄れる。色んな場所で見上げた色んなものが崩壊していくのがわかる。なあ霊夢、この異変で俺達がしたことに意味なんてあったのかな」

「意味なんてあったわよ！ 意味ないのは真実を真実と捉えよとしないこの大馬鹿もの達よ！」

「そうだよ。意味あった。俺は瀬笈が死ぬ運命を知っていた。だから必死になった。好

きだったから、運命に抗う姿も、あの天然も、可愛いかったから。だから、一緒にいて、一緒に抗って、やつとたどり着いて、俺は瀬笈の事を愛していた。だから、異変が終わったら、気持ち伝えようと思ったんだ。臆病だった俺は変わったんだ。だから、臆病を捨てて、強い自分で立ち向かえた。意味はあったんだ」

でもその意味も無くされた。

「皆壊してやる！ 瀬笈を嫌う奴なんて！ 皆！」

フランがこの幻想郷のルールを無視して壊し始める。次々に命が失われる。紫が無理矢理止めた。だが、あまりの狂暴さに皆が怯え始める。フランの能力を考えたら、当たり前だろう。

幻想郷が歪み始めていくのがわかる。ルールも崩壊するだろう。関係も変わる。もう、どうにもならない。

「これが夢だったら……？」

夢？ そう言えば、瀬笈の偽物もそう言っていた。鬼？ 本当に夢なら今俺は眠っている……列車？ なんていま列車を考えた？

「……………」

なんだこの違和感は、何かが違う。俺は今、この世界に疑問を感じている。悲しみで押し潰されている筈なのに、俺は今、行かないといけない気がする。でもどこへ？

偽物の瀬笈は攻撃を受けたら消えた。まるで夢の中で驚いて飛び上がるように覚めるように……。

そもそもどうして瀬笈が殺された？ 紫も、風見もいるのに、そう簡単に殺されるはずがない。なら、どうして？ 夢だから、悪夢だから？ 何か、忘れてる気がする。いや、忘れてる！ 内側から戦えと言っている。でも、瀬笈を殺された恨みからじゃない！ なんだ！ おれは何を忘れてるんだ。

「この悪魔め！」

誰かが瀬笈に石を投げつけた。俺は咄嗟に庇う。瀬笈の髪にある葉っぱが眼にはいる。

悪、葉っぱ……鬼、夢、誰かを救う……

鬼滅の刃!!!

「……然葉?! その格好は」

鬼殺隊の隊服、葉柄の緑の羽織、腰につがえた刀。全て思い出した。ここは下弦の壱の夢。今すぐに自分の頸を斬って起きないと……できるのか？ こいつらの前で、止められる！ 思いつきり、躊躇なくしなくては行けない。俺にできるか？ いや、できない。炭治郎でさえ一回めは躊躇したんだ。俺にできるはずがない。起きれない！

「くそ！ なんで俺はこんなにも臆病なんだ！」

夢の中の俺は臆病を捨てていた。なら、俺も臆病を捨てろ！

ダメだ。今から自殺しないといけないと考えると震えが止まらない。それに、たとえ捨てずに起きたとしても駄目なんだ。捨てて起きないといけない！ 臆病を捨てるほどの勇気がないといけないんだ！

……………悪夢に変わらなかつたら俺は瀬笈を完全に救っていた。夢の中の俺。

瀬笈の死体を見る。気持ちを伝える……………か。そうだな、俺も救えたら、瀬笈に気持ちを伝えよう。やっぱり瀬笈の事を考えると勇気が沸いてくる。でもこの勇気は今までと違う。自分が瀬笈葉だと思ってきたから勇気が沸いた今までとは。瀬笈に伝えるということは、俺は瀬笈であつては行けない。翡翠島然葉と言う、一人の男だ。

そして、命を落とした瀬笈も、魂だけ来た。誰かを救いたいのと同じだ。俺は翡翠島だ。この世界に現れた小さな島だ。そこに全員を立たせてやる。だから、瀬笈の願ひも俺が立たせる。”皆さんと生きていられますように”煉獄さんも、しのぶさんも、皆救つてやる！

俺はその意志を示すために目の前の瀬笈の髪の毛の葉っぱを取つて俺の髪に付ける。そして刀を抜く。

「然葉、何をするつもりなの？」

「悪夢、夢の中とはいえお前と会えて嬉しかったよ」

「夢の中って、まさかあんた、葉の偽物の言葉を信じちやダメよ！」

「俺は鬼殺隊の翡翠島然葉であって、幻想郷の翡翠島然葉じゃない。だから行かなくてはいけない」

「行くって、どこへ」

「俺だけが、物語に抗うことができるんだ。だから、目の前にいる瀬箴も一度は救えた。すまないな、もう行かなくては」

「ちよつとまちなさ！」

俺は躊躇なく自分の頸を斬る。いきなりのことで誰も止めることは出来なかつた。俺は目を覚ます。

「起きた！」

辺りを見渡すと横に炭治郎がいた。俺も怪我をおっている。

「炭治郎！ 今起きた！ 今どうなってる！」

「この匂いは、然葉！ 起きたのか！ 今煉獄さんと上弦の参が戦っている！」

「どんだけ寝てたんだ俺は！」

煉獄とアカザが戦っているのが見えた。まだ怪我をおっていない。始まったばかりだ。

「葉が然葉の代わりに戦ってくれたんだ！ 葉は凄いんだな！ 上弦の月の攻撃をかわし続けたんだ！ まるで当たっているように見えても当たっていないんだ！」

「瀬笈が?! どうやって……俺の体を使ったのか……なるほど、グレイズか」

「グレイズ？」

「”避ける”を極限まで追求したような技術だ。当たってはいるがダメージがない。紙一重よりも凄い」

「然葉はできるのか？」

「出来ない！ だがやる必要はない。炭治郎、善逸を呼んできてくれ。考えがある」

「わかった！ 善逸！ どこなんだ！」

瀬笈がアカザの攻撃を避けたとなると、俺の記憶から作戦を知っている。だが俺じゃないと出来ないから時間稼ぎをしてくれたんだ……ありがとう。

始めよう。対アカザの作戦、たった一撃の為の作戦を！ 煉獄に希望を託す作戦を！

アカザの天敵

煉獄さんが戦っている。上弦の参のアカザと戦っている！早くしてくれ炭治郎。善逸を連れてきてくれ。原作通りなら煉獄さんの戦いは長くは続かない。だからあることをしたいのに戦いの間に入れない。このままじゃたつた一撃の為の行動ができない！

「破壊殺・空式！」

「肆ノ型 盛炎のうねり！」

見えない。目で追えない。まずい！あの二つの技がぶつかるってことは、この後に”破壊殺・乱式”と”炎の呼吸 伍ノ型 炎虎”がぶつかり合って煉獄さんが取り返しのつかない傷を負う。考えている時間はない！

「上弦の参！ 少しでもいい！ 待ってくれ！」

剣士としては恥ずかしいけれど、鍛え抜かれた柱の煉獄さんには侮辱になってしまいかもしれないけれど、俺は煉獄さんを死なせたくない！

「戦いに待つことなどない！ 瞬く間もない死闘それこそが強き者の戦いだ！」

アカザは俺を見る。何か驚いた表情をする。その瞬間、煉獄がアカザの腕を切り落と

した。

「？」

一瞬だけど、アカザが隙を晒すほどに驚いた？ 何だ？ 何に驚いた？ 俺？ 何故

俺を見て驚いた？ 何に？

『口調が違ったから驚いたのかもしれないです』

口調？

『はい。さつき避け続けた時に少し会話をしたんです。その時は私の口調でしたので、今は然葉さんの口調です』

いや、口調で驚くような奴じゃないだろ……瀬笈だったからか！ そうだ！ アカザは闘気で感知する。体の所有権が違えば闘気も違う。同じ体から別人の闘気になっているんだ。感知能力の高いアカザからすればその違いをはっきりとわかる。二重人格にも会ったことないと考えれば何百年生きた後の初めての存在。そりゃ驚く。

………瀬笈、今思い付いた。突っ込むぞ！

『はいー！』

俺は走り出す。アカザに殺気を放ちながら。今の俺では間合いに入った瞬間に”死ぬだろう。それはあくまでも煉獄さんも対処できない間合いのみ。後ろから近づけ

ばそれは本当にアカザの腕や足一本分だ。破壊殺・羅針が展開されている今、体の所有権を交互に変えればアカザは嫌でも気が散るだろう。異質と言うものはそういうものだ！

「俺と杏寿郎の戦いの邪魔をするな！」

「近づくな！ 間合いに入れば死ぬぞ！ 距離を取れ！ 命令だ！」

「すみません煉獄さん。それはできないんです。この体はもう、俺の意思のみでは止まることは無いんですから。そしてアカザ」

俺は日輪刀を前につきだす。アカザは俺の方を見ていた。邪魔な俺を先に倒そうとするだろう。だけど、俺は倒されない。何故なら

「お前にとって俺は天敵すぎた」

次の瞬間、アカザは俺を見失った。直後に煉獄に隙を晒している事に気付き距離を取る。だが疑問に思うだろう。”隙があつたのに攻撃されなかつた”事に。

そして困惑するだろう。鬼殺隊の俺が同じ鬼殺隊の煉獄さんの刀を掴んでいることに。

「上弦の参が見逃したのか?! いや、そんな筈はない！ あれほど力のある鬼が目の前で敵を見落とす筈がない！ 然葉少年、今何をしたんだ！」

煉獄さんも困惑してくれて良かった。おかげで両方動きが止まつたじゃなきゃ刀を

握めないしやりたいこともできない。

俺の体質と呼吸が植物で良かった。じやなきや、光輪刀の誤法の一瞬の光で目眩ましました後に植物の気配にしてアカザの羅針をすり抜けることはできなかつた。

「それは言えません。敵に聞かれたら対策されてしまいます」

「うむ！ 手の内を晒すようなことはさけるべきだな！」

「ですが、一つだけなら盛大にお見せします」

俺は煉獄さんの刀を力を込めて握る。名前を教えてその場から離れた。

「お館様が言っていた”日の光を吸収できる体質”はこう言うことでもできるのか！」

「杏寿郎。なんだそれは」

煉獄はそれをアカザに向ける。

「上弦の参！ この”光輪刀の誤法”がお前の骨の髄まで焼き滅ぼす！」